
織田信奈の野望～相良良晴ともう一人の転生者～

織田上総介信長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織田信奈の野望〜相良良晴ともう一人の転生者〜

【Nコード】

N7718T

【作者名】

織田上総介信長

【あらすじ】

相良良晴ともう一人の転生者の二次創作です。

序章時を越えた始まり（前書き）

前回の作品を消して申し訳御座いませんでしたm（――）m

ちよつと、主人公を三人にしたせいか自分が話の内容に混乱し始めたので御勝手ながら中断させて頂きました。

なので、前回の反省点も含め主人公を一人に絞り新たに話を作り直してみましたので

御勝手な事をしてまた申し訳御座いませんが、よろしくお願い致します。

序章時を越えた始まり

何事も唐突に起きるものと痛感する。

職場をたった二カ月余りでクビにされ、借りてるアパートの一室で電気をつけた途端に何をしようか思い付かないままベッドの上で一休みした後だった。

何故か、何か騒がしい物音が激しいので周囲を見渡すと築十年以上経ったストープや流し台付きのワンルームだった筈だというのに見覚えが無い何処かのおんぼろな寺の中に見え

”きつと仕事をクビにされたストレスか何かで精神的に疲れてるんだろう”ともう一度一眠りしようとした瞬間

とある狸の耳を装着し丸い眼鏡をかけた少女が目の前に現れるや否や”うゝん。こんなところで怪しげな方が休んでいますが無事なんでしょうか？”と興味津津に見つめられる。

正直、訳が分からんと思う私は頭の中で整理が出来ないまま狸寝入りを続行するが

それでも、なかなか離れてくれない小狸みたいな少女が”しょうがないですねえ”と呟きながらも腰に装備してある太刀を抜き

目の前で刀を床に突き刺した瞬間、彼女に身体を向けて正坐をする
と彼女はニヤリと笑みを浮かべながらも私は何かハメられた気分で
溜め息を漏らす。

まあ、これが彼女と出会った最初にして最悪な始まりだった事は今
にして思えば軽いものだ。

その後、ここが何処か分からないと聞けば駿河の国だとか時代が何
故か戦国乱世の西暦に直せば1550年代だったりと多少、歴史好
きな趣味を持っていたせいかな話の内容だけ理解したつもりだった。

まあ、この事態に慣れるのにはかなり日にちもかかり知識がちょっ
とあっても全く触れた事の無い事ばかりと何もかも分からないまま
三年の月日が過ぎた頃

その時、小狸こと松平元康様に拾われ適当に話を誤魔化し乗馬やら
武器の扱い方など元康様の下、敵対していた織田との戦で幾ら身に
つき昔々習っていた剣道が多少役に立ったのか剣が多少振れただけで

実際は、我が身欲しさの為にどうにか生き延びている。

まあ、最もその経緯を話すのが世の常なのだろうが、何せ語れば元康様が御仕えする今川義元様というお嬢様が都文化に熱中し過ぎて何もかも疎かところで

私は、ただ啞然とするだけであつた。

また、私も自らの名を捨て義元様が吉良義康と吉良という名字を義元様自ら名乗るご許可を頂いた上に義元様の一字と元康様の一字を組み合わせて頂いた名に当初は抵抗を感じたものの

三年もの月日経つにつれ慣れて来る。

そして、今は今まで以上に無い元康様の配下として丸根砦を攻略しており

織田配下の将である佐久間盛重サクマモリシゲという髭が濃く肩幅が広い上に槍を振っては近付けんよう警戒している中年親父が抵抗を続ける為

相手の槍を剣で受け止めながらも殺めるのに必死だったりする。

「ちいいい！！このまま苦戦しても埒が無い！」

「ふんっ！今川のひよっこ侍がよう抵抗する！！だがな！！この戦、既に勝敗ここにありっ！！主みたいなひよっこ侍には悪いがここで朽ちて貰う！」

「……………勝手な事ばかり言う。今川のひよっこだあ？私は今川の者ではない我が命を拾った松平家の臣下吉良義康よっ！！はあああああ！！！」

盛重が振う槍で構えていたなまくら刀が折れ咄嗟に小太刀を抜き相手の喉仏へとひたすら進むと右肩に槍を突き刺されたりと酷い傷を負いつつ

私が目の前にいた敵の喉仏に小太刀を突き刺し終わると同時に丸根砦は、陥落する。

だが、勝敗は義元様が本陣を織田本隊に奇襲され降伏した事により今川家は事実上、織田に敗北し

元康様も咄嗟に岡崎に帰るも三河で独立を果たす。

これが、きっかけで元康様……………いや、姫様を支える第一歩が始まっ

たのでないかと感じ大して功名も無い自分が吉良なんて大それた名字のままでは家中で浮かれるという訳で最悪、名字無しでも良いと感じていた私だったが

自分を下に見過ぎるのも如何なものかという理由で却下され松平家を支える本多一族に加えて頂き名を本多左近重忠と姫様から名を与えられた。

次回予告

「原作じゃ本編の二巻辺りからこの話が進みます」

「いや、それじゃ次回予告になってねえよ！というより、オリキヤラ説明無しでストーリーを進めるなんてある意味変わってるぞ！？」

「まあ、私の説明は若干、肩幅が良いだけで何処にでもいる冴えな

い奴が勝手に生き延びた野郎という事として……次回、第一話清洲同盟と信奈の求婚！！いざ刮目せよ！」

「……………まあ、良いとしてやるか」「まあ、私の説明は若干、肩幅が良いだけで何処にでもいる冴えない奴が勝手に生き延びた野郎という事として……次回、第一話清洲同盟と信奈の求婚！！いざ刮目せよ！」

「……………まあ、良いとしてやるか」

「そして、猿がはあはあと織田信奈様を始めとする乙女キャラに興奮するところもお見逃さず！！」

「おい！！それ完全なる捏造だろ！！読者さんに嘘の予告するなよ！！」

「まあ、鬼柴田の大きな胸で興奮してるのは事実なのですから同じでしょう。以上、相良良晴と本多左近の次回予告はここで終了させて頂きます。次回もまたよろしくお願い致します」

「お前は、次回の話で長秀に弄られればいいんだあああ！！」

「何を言ってる！？弄られるのは我が姫様松平元康様だけで十分だ

「!」

(○ ○+)「さあ、左近さんは後で弄り尽しの刑決定で良いですね」

..... (;)!!「ガーーン!!」

(○ ○+)ニヤリ 元康

..... (;)!! 左近

序章時を越えた始まり（後書き）

うーん、やはり主人公一人だと話が考えやすいです… f ^ | ^ ;

本当、このサイトに来てからどんな二次創作を書こうか真剣に悩める事から色んな先生方の作品が教材ですので、何故か楽しませて頂いております。

ただ、徳川家の家臣などでオリキャラがちょっと増えるかもしれないかもしれませんがその時は温い目でよろしくお願いします。

第一話清洲同盟と信奈の求婚？（前書き）

ああ、携帯じゃ文字数が足りない（T|T）

第一話清洲同盟と信奈の求婚？

桶狭間での戦にて、今川軍敗北の報せを聞き我等、姫様は三河で独立した。

今では、白銀なかる髪を腰までスラツと伸ばしながらも姫様より一回り高いくらいの低身長が目立つのにも関わらず

年齢が私と近いというのには正直誰もが信じないだろう。

だが、胸が大きいという点こそ姫様に妬まれやすいらしく最近では、肩が凝りやすいと溜め息を漏らす松平家家老を務める酒井忠次殿に呼ばれ

尾張の織田信奈から尾張に来いと姫様宛へ送られた文を読み終えろと二人は、ただ溜め息を漏らす。

「はあ。酒井殿、この文どうしましょう？」

「まあ、無暗に伏せたところで何も意味がなかつ。それに、織田

と一戦交えたところで東の武田と共倒れするという流れが浮かぶ。
くっ、織田信奈……こちら側にどう話をつけようとするか見定めたいところだが……こちらは、三河の動きを監視せねばならぬだろう。悪いが、織田信奈という者が如何なる者か半蔵を通じて教えてもらえんだろうか？」

「それは、織田側の監視か何かやってみよという事でしようか……」

「……すまん。そういう事だ。だが、貴公一人にさせるのも私としても酷でしか無い。織田が狙う美濃攻略をどこまで進めるか見定めさせてもらいたい」

忠次殿が”すまない”と呟きながらも信奈様から来た文に目を向けつつ彼女に慰めるよう沈んだ私を抱き締める。

「まあ、君は松平家でも忠誠心が強いからね。こっちとしては、失いたくも無いのだが……織田なんて対立関係だった勢力と同盟結ぶのに何も疑わないのが無理だから悪いけど君に託して貰うよ」

「は、はあ……（忠次殿の胸は、三河の牛と噂されるくらい大きいから正直、今のまま理性を保たせるのが辛い……）」

その後、忠次殿から織田家について聞ける範囲内の話を聞くと私は、尾張へ向かう準備を済ませる。

翌朝

三河より参列の先端で指揮をとる私は、忠次殿が姫様に話をつけた”警備役の代わり”だった筈がこれから美濃ふの戦いで経験を積んで貰うので、という教育係の名目まで本日の朝に付く。

また、その娘は桶狭間で初陣を迎えそれなりの経験を積んだ結果

無口で冷静な戦況分析が出来るのは良いが愛用する蜻蛉切という槍を振るうだけで容赦なく暴れ続けるらしい。

それに、暴れてる最中の彼女は、味方でも抑え込むのに人材が足りなくなると文では記してあったのだが……

「……………よろしく」

こちらに反応する十三、四くらいでまだ身長が姫様並に低いのにも関わらず肩までかかるくらい伸びる黒髪とふっくらと膨らむ胸を強調させる軽装で足軽が装着しそうな鎧と肩にかける数珠などが目立つ少女こそ本日から面倒みる事となる本多平八郎忠勝という娘で

このまま戦場に出して死なせては、今後の松平家復興なんて難しいからと説得されたらしい姫様だが

今は、これから御会いになる織田信奈様の事で頭がいっぱいらしく何も声をかけない方がいいと半蔵殿から助言を頂いた私は、ずっと隣りでくつつくようこちらを見つめる平八郎に苦笑する。

「こつちをそんなに見続けては何かと落ち着かんのだが……」

「……………平八郎は、本日より姫様の命により本多左近重忠殿。つまり、姫様の側近から貴方の専属護衛役に選ばれた」

「私の事は、左近で構わん。だが、あまり見知らぬ関係だった筈とはいえ私の顔なんてよくわかったな……………」

「……………忠次殿が、松平家で最も冴えない雰囲気をだす上にそこらで旅をしている僧みたいに殆ど髪を切り上げている特徴はあいつしかいない……………と言ってた。だから、簡単に見つかった」

「何か、随分貶された気分だな。まあ、今後とも期待させて貰うよ」

その後、何も語らなかったせい

尾張まで無言なまま馬を走らす私と平八郎は、姫様が清洲城へ入城していくのにガタガタと身体を震わせていた事に心配しつつ姫様の後を追うよう後ろから着いていく。

「姫様、随分と身体が震えてるが大丈夫だろうか……」

「……………織田信奈とは、人質時代から色々ある……………無理ない。ただ、お腹空いた」

「後で、飯を食わせる。それより、その色々な関係が如何なるものか気になるが……………吉姉さまとかばやいてる限りだと……………」

「……………やらしい関係？」

「ふむ。うつけと呼ばれし姫ならばなりかねんだろう」

平八郎が、顔を赤くしたまま姫様の後ろ姿を見ると今までこちらが話していた内容が全て聞こえてたのだろうか

こちらへ振り向くや否や顔を赤くしたまま頬を膨らませて睨む。

「左近さんは、平八郎さんと変な話をしないで下さい！私と吉姉さまは……………」

「……………逆らえない関係」

「ふむ。うつけ姫とは幼き頃とはいえ随分な関係だったんですね……………」

幼き頃の姫様がまだ戦場で、敵側として見かけた事が無い信奈様に虐げられている姿を頭の中で想像すると姫様は、顔を赤くしながら”もうもう！！左近さんはそっち方面で考え過ぎです！！”と私の脳内世界へ入り込むよう考え込んでいた私の耳元に向けて大きく声を上げたせいかな

私の身体がフラツとふらつくところを平八郎がガチツと腕で掴む。

「……………左近、大丈夫？」

「ふむ。ただ、この領内は商いが発展し過ぎだ。これから、不平な盟約が結ばれない事が気になるな」

「……………どついう事？」

「まあ、尾張のやり方が如何なるものかハッキリしないが……………見

たところ尾張は、商いで発展した国というところと見る。となれば、
姫様が献上した八丁味噌を如何にするのだろうな」

「……………」

私は、平八郎の豊満な胸に当たりながらも何処からともなく出した
三河名物の八丁味噌を右手で持ち左手に幾つかの小銭を持つと

姫様は、何の説明するか考え込むようその仕草をするか除き込むよ
う見つめる。

「まあ、一つの策に過ぎんが織田の姫様は、この八丁味噌を金にし
たい訳だ。だとすれば、東の遠江にいる今川家の残党や駿河を奪つ
た武田を警戒しなきゃならん姫様は、西に敵が出来ては敵わんとい
うのもありここで同盟を結びたいんだろうが、向こうは無条件で結
んでくれるとは限らん上に、北の美濃攻めがあるだろうから何でも
揃う銭を如何に今より増やすか思考している筈だ。その為にも外に
売れる物を増やしお金を増やそうと考えてるかもしれない」

「……………」 分りにくい」

「……………」 うん。要は、この味噌は尾張に近い村で造られている。
それを、織田は戦わずして同盟を結ぶ条件という形で手に入れ領内
より外で儲けその儲けた金で武器や食糧を増やそうとする可能性も

ある訳だ」

「……………ん？そうなると三河の財政が危うい」

「そうなるが……………これは、あくまでも私の推測でしか無いから向こうがどう考えてるか分からん。だが、姫様の事だから何か打開策の一つくらいは考えてるだろう」

以上、説明を終わらせ姫様の方を向くと姫様は、冷や汗をかきながらどうしようと言わんばかりにこちらに目を向けており

どうやら、信奈様の事で頭がいっぱいだったと言わんばかりの状況だったらしく

何故か、助けを求めんがゆえの目付きでこちらを見つめている。

「はあゝ織田様も松平家を財政難に陥れても何の特もしないどころかむしろ、こちらが武田に潰されるてはもとも子も無いゆえ、上手く話をつければ問題無いでしょうが……………尾張の人間は、かなりの味噌好きとお聞きした事がありますゆえ最低でも尾張で商いさせる際に、関所で税をかけないようにするとかでしようかね……………」

「ううゝ当分どう乗りきるか悩みどころです」

「まあ、今から不安を抱いても致し方ない事です。まずは、織田様と盟約の話を進ませて頂くようよろしくお願い致します」

「怖いですから、左近さんと平八郎も一緒に入りましょ」

姫様に裾を引っ張られ室内へ入った私達は

湯帷子を片裾脱いで腰に瓢箪をぶら下げ肩に種子島を担いで胡座で堂々と座り込む一人の少女を見て啞然とする。

「久しぶりね、竹千代！」

「うゝ、ぶゝお久しぶりでず、吉姉さまゝ」

ふるふると震えながらも頭を下げる主君の姿に私と平八郎の二人は、今の姫様がどう盟約を結ぶか不安を抱きつつふるふると震える背中をただ見つめながらも後ろで頭を下げてる事しか出来なかった。

第一話清洲同盟と信奈の求婚？

次回予告

「あちゃゝ清洲同盟が始まった辺りまでしか終われませんでしたね」

「しょうがねえ。いくら前の携帯が壊れてきたからという訳で代えても打てる文字が一万字以内なんだ。そのせいか、題名の後に？とか着けちゃってるが……誤魔化したつもりなのか？」

「さて、そうなのやもしれませぬな。さて、次回はようやく清洲同盟から話が進み発情期上等な猿殿がようやく登場！！」

「何が発情期上等な猿殿だ！！テメエだって忠勝ちゃんの胸に和んでるじゃねえか！！」

「……………そうだったかなあ？」

「くううう！！何か嫌な奴！」

「……………左近に拳を放とうとするなんて……………甘い」

「あつ、やるんなら殺さん程度にお願いね」

「……………了解」

「や、止める！！平八郎ちゃん！お前みたいな奴がこんな奴の言う事を聞く必要なんかねえんだ！！」

「……………左近を酷く言うのは許さない」

「さて、二人は無視して皆さん、次回もよろしくお願いします」

第二話清洲同盟と信奈の求婚？（前書き）

また、後半にオリキャラが出ますがよろしくお願い致します。

第二話清洲同盟と信奈の求婚？

私達が頭を下げる目の前でうつけ姿で現れる先の桶狭間にて今川に勝利を掲げし尾張の姫君こと織田信奈様は、目の前で頭を下げていた姫様に臣下として加わっている前田犬千代という無口な少女と相良良晴という新参者で先の桶狭間でも敵大将の命を庇うという謎な行為を果たした事で

私の中で要警戒人物として認定している猿を紹介すると姫様も後ろに控えていた自分達を今後の織田家で使える戦力という名目で紹介する。

「私は、松平元康、あざ名は竹千代です。よろしくです。そして、こちらに控える人達は、我が松平家の部将ですけど剣の太刀筋や戦闘指揮が得意とする本多左近重忠さんとまだ、戦の経験は浅いものではつきり言えませんが、槍の腕なら三河でも一、二を争う強さを持つ本多平八郎忠勝ちゃんをお連れさせて頂きました」

「デアルカ。左近と平八郎とか言ったわね。丁度、美濃攻略が始まるだろうからその時には期待させて貰うわよ」

「ハッ！！ご期待を裏切らぬよう務めさせて頂きまする！！」

私は、この時自分が松平家で部将の地位にいた事が初耳だったせいかなので三河に来てから仕事が増えたり禄が増えたのか疑問に思っていたのだが

まさか、自分が部将の位に立たされていたという意外な事実には内心驚きたかったものの今は、こっちの重要な話に耳を傾けようとしていた時には八丁みそが思った通り安価で売られる形と事が進んでいたりしており今では、織田様と相良殿が痴話喧嘩みたいな展開を繰り広げていた。

「ん？こんな場面に凄まじい光景ですな……………」

「……………そんな場面では己の世界に入ってた左近は、人の事言えない。因みに、今日から平八郎……………左近と住む」

「そ、それよりあの二人いつもこんな感じなんですか？」

「……………そう。犬も食わない大喧嘩。清洲城の、名物」

姫様が、おそろおそろ前田殿に尋ねるとあれでもいつもじゃあ

てるだけで仲良しだと言っただから正直、こんなところで客将みたいな形でいられるかやや不安を覚える。

だが、そんな空気もすぐに消え去り突如、謎の美男子らしき者が目の前を通り過ぎると姫様と前田殿が”おお”と歓声を上げていたが

やけに艶がありそうな黒髪や顔立ちなど色白な美男子にしか見えな
いが、よく目を見張ってみるとフワツと服の上から膨らんでる胸に
私は、思わず”お、女！？”と小声で呟くと

その通り過ぎた者は、一瞬だけこちらを睨みつつ織田様に自らの名
を浅井長政と名乗り織田と同盟を結ぶよう要求するが

その話になるまでやけに相良殿が浅井殿に突っかかてた為、姫様に
気付かれないよう天井裏から見守っている半蔵に目で合図しては、
密かに部屋の外に赴いては、彼にとある事を調べてもらうよう室内
の外で打ち合わせていたのだ。

「浅井久政の子に嫡男がいたか調べれば良いのだな」

「ふむ。それに、今の浅井家は長政という者が久政を追放したと聞
く。それに、浅井家は元々、越前の朝倉と親交深い家柄……家中
の中でも織田と親交を深めるのに疑心を抱く者がいてもおかしくな
かろう」

「ふん、左近殿からみれば探りやすいことみたか……まあ、それは大方間違いいではない。では、こっちでその件はやっておく。織田家の方も頼む」

「まあ、安心なされよ。織田がどんなところか把握しきれていないが……何かあれば文で報せる」

その後、何事もないかのようこっさり室内へ入ると顔を真っ赤にした織田様が浅井長政に婚約を求められていたとこらしく

そこを、織田の家臣に過ぎない相良殿が口出ししていたとこだった
せいか

正直、怖いもの知らずというか後先なにも考えていない小僧というべきか、どちらにせよ私は、隣にいる平八郎と共にただ見守るよう見続ける事しか出来なかった。

「……………ん？左近、目が怖い。浅井長政に何かある？」

「ハハッ、今日会ったばかりだというのに、平八郎は敏感だね。まあ、北近江の浅井家がここと同盟組むとして美濃を狙うにしても南には甲賀の忍と手を組む六角家がいる。わざわざ、ここと手を組む

よか美濃の斎藤義龍や、越前の朝倉義景と不戦同盟を組んだ方が六角家と何のいざこざも無く戦えるんじゃないかと思つたまでの事……だから、この話がどうも都合良い話にしか見えないんだよね……」

「……………左近は、考え過ぎ。この話し合い……………あの猿が揉み消してる。その後、平八郎が面倒みるから休む」

「ふむ。それにあの猿が浅井長政と当たってるせいで確かに、縁談の話が目茶苦茶になれば織田は、今後も独自に国を治めれるか……ただ、あの猿は面白いが好きにはなれないかな……………」

「……………それは、平八郎や忠次殿も同じ。後先知らない奴は、邪魔なだけ」

平八郎に何か悟られ終えた頃、浅井長政が美濃を手に入れた後まで信奈様との話を伸ばすという条件にして去った後

平八郎と共に信奈様が用意した長屋へ赴く最中

数名の兵がこちらを囲むので、私が太刀を抜こうとした瞬間

平八郎が自ら振るう愛用の蜻蛉切を構え数名の兵達が抜刀して踏み

込んだ刹那

平八郎は、私を地面に倒した後、円を描くよう蜻蛉切を片手で振るうと襲って来た兵達の胴には深い切り傷が原因で酷い出血のまま倒れており

その後、地面に倒れてた私が膝を地に着けたまま立とうとした瞬間

長政が太刀を構えて襲って来たので咄嗟に持っていた自らの太刀で彼女の一撃を防ぎつつも

彼女の着物が切れたせいか若干豊満な胸がふつくらと白装束越しから見える形となったので、必至に自分の胸を隠そうとした長政に平八郎は彼女の首筋に穂先を当てる。

「……………左近、平八郎と違って加減知ってる。だから、今のお前に命ある」

「……………その様だね。全く、君達を狙ったのは失敗だったよ。それに、君はまだしもその男は、思ったより侮れない様だ。大方、私の命を奪わなかったのも訳があるのдарう？」

「まあ、尾張のうつけ姫とはいえ今、尾張が他勢力に取られれば我

が松平の独立維持は不可能だ。ならば、利用できる勢力は利用しその間にでも力を蓄えようと一部の家中で動いている」

「それで、君達もそつち側の家臣という訳か……松平元康も羨ましいものだよ。因みに、私が女だと言う事を広めたらどうなるかわかってるね？」

「斎藤義龍と手を組み尾張を潰すと言いたいのかな？まあ、君個人がどんな因縁を持ってるか分からんが織田を利用しないと六角を潰す事は出来ない筈だ。美濃の斎藤義龍の父が道三ではなく、道三が追放した土岐氏の流れという噂がある。それが、真で無いにしても土岐氏と同じ源氏の血が流れる六角から見れば手を組みやすい勢力の一つだ。そして、仮に手を組まれれば浅井家が今の勢力を保つのは不利となるだろう」

私が仮定した話を聞きながら睨む長政に平八郎は、穂先を彼女の首筋から放すが彼女は、未だに警戒しながらも太刀を鞘に納めて白馬に跨がろうとしたので

一旦、彼女を引き留めた私は、自らの衣服を上だけ脱ぎ去りそれを彼女に渡す。

「まあ、隠すには無理あるだろうが……性別が知られるよりマシだろう」

「ふん。君の服なんて借りたくも無いが……仕方ない。それは受け取らせて貰う」

「ハイハイ、そんなの構わんからさつさと着替えて立ち去れ。どうせ、適当に命でも狙われたから服を着替えたとでも通じるんじゃないか？何せ、君の供はこつちを襲ったせいで全員、殺られている」

「れ、礼は言わん。これにて失礼させて貰う」

上半身を裸にしたまま長政が去っていくのを見届けた私は、平八郎に見つめられつつ長屋へと戻り

その後、彼女と寝るという事を忘れた私は、彼女の寝相で本能を失わないよう意識していたせいか、全く眠れないまま一夜を過ごし

翌朝、全く家事が出来ない同居人の平八郎に面倒を見られる形となる。

「……………昨日、女の前で無理をした結果。半蔵の部下を通じて忠次殿に話した」

「くっ、余計な事言うなあ」

「……………忠次殿、呆れて胃を痛める。また、左近は平八郎だけの世話役じゃない」

私は、彼女が何を言ってるか分からないまま文を受けとるとその文には、忠次殿が同一族である酒井忠尚という方の弱みを握って手に入れた元服したての有能な娘だけど面倒を頼むと書かれており

その文を読み終えた後、空のような水色で首に届かない程の短髪が目立ち背丈も前田殿や平八郎と同じくらいだが、胸が平八郎みたいに大きく無いが、信奈様と同じくらいでふっくらある少女が現れる。

「お初にお目にかかる。某、酒井忠次殿と松平の御館様の命により本日から御世話になる榊原康政と申します。以後、よろしく頼みますぞ」

「……………詳しい詳細は、忠次殿の文で読ませて頂いた。某が本多左近重忠だ。こちらこそ、以後よろしく頼む」

「……………平八郎は、初めてじゃない。むしろ、昔からの仲」

「ふむ。相変わらず平八郎らしいな。後、失礼ながら左近殿とお呼びしてよろしいか？私の事は”康”と申して構わんゆえ堅苦しい仲

は無しだ」

「…………いきなり、馴れ馴れしい。左近、困ってる」

私は、尾張に移り住んで一日しか経ってないなも関わらずいきなり同居人が出来たという事実を飲み込むのに昼間までかかり

近くに住む相良殿に早速ハーレム野郎と羨ましがられながらも頭を痛めていた。

次回予告

「…………ようやく、織田様の求婚話が終わりましたな。因みに、相良殿ももう少しでハーレムでは無いですか（笑）」

「…………それは、嫌味かよ？ テメエが変な助言さえしなけりゃ口りに間違われなかったんだぞ！！」

「おやおや、まだ小説の内容でそこまでいかないかもしれないというのに随分と慌てておられますな。因みに、次回！」 幼き軍師、竹中半兵衛”いざ刮目願います」

「おい！俺をまた無視すんじゃないねえ！」

「…………サル晴、五月蠅い」

「今後の別名は、猿顔光源氏と致しましょう。さぞ、周りの印象が目立ちますぞ」

「康ちゃん！？俺を本気で幼女好きにしたいだろ！！」

「…………馴れ馴れしく言うては困る。私は自ら同士と認めぬ者に名を呼ばれる謂われは無いのでな」

「わ、分かったから槍を向けるな！？」

「…………康政の意も通り。相良サル晴は、軽く見すぎ」

「…………平八郎、貴公は奴にその槍を向けたいただけだろう。さて、猿光GENJIの行動にこう御期待ということで皆さん、それじゃまた次回お願いしまゝす」

「源氏をGENJIにして誤魔化すんじゃねえええ!!」

第二話清洲同盟と信奈の求婚？（後書き）

まずは、感想を下さった方ありがとうございました

正直、自分で投稿する作品で一つでもご感想がくると初心の頃を思い出し嬉しいものです。

まだまだ、未熟者ですがどうかよろしくお願い致します

第三話 幼き軍師、竹中半兵衛（前書き）

原作から少しずつずれます…（^| ^ ;）

第三話 幼き軍師、竹中半兵衛

ただ今、私の寄せ集めの五百も満たない足輕部隊は、織田本隊と距離を離しつつ美濃長森より離れたところで部隊を一時的に止め

戦況を把握する為、数名の兵を織田本隊の近くまで放ち様子を見ていたりする。

「いくら、蝮が仰つてた天才軍師がいるとはいえ今回の織田様の采配は、爪が甘過ぎましたな」

「……………桶狭間で勝つたからと図に乗つてた結果。左近、この手勢で戦うの難しい。変に移動したら壊滅」

「……………ふむ。そうだな。この戦況だと士気を上げるにもあの霧の中ではな……………手の空いてる者がおれば火の準備をせよ！！敵が織田本隊に囲み出したところを狙い敵軍の一角を襲いそのまま退却する！」

「……………悪くないですが、被害は侮れませぬな」

「……………退却して兵を温存する方がいい。でも、織田はそれを許さない……………だから、めんどくさい」

最近、平八郎に習って真つ黒で軽装な甲冑に装着していた康政は、信奈様達が美濃の長森まで深追いしていくのに溜め息を漏らしつつも

愛用の直槍を構えては、私のとこでのんびりと休んでおり、本人の要望でヤスと呼ぶこと榊原康政と何故か対抗するかのような平八郎も変に甘えるようこちらへ寄りついており

ただ今、理性を保つ事だけで必死であると心中告げていた時だった。

先ほど、織田本隊の様子見に言っていた数名いた兵の中でたった一人だけが汗だくでこちらへ戻っては、織田本隊が美濃の部隊による奇襲を受けているとの報せを聞いた後

清洲よりたった五十の兵を率いる蝮と一旦、合流する。

「……………主が三河から来た例の客将か。思った以上に兵の扱い方が上手いではないか。それで、その手勢は少々少なすぎるのう」

「……………それでも御座いませんよ。ただ今まで今川側で戦っていた

慣れに過ぎません。それに、今の戦況でしたらこのくらいが丁度良いくらいです。それに、道三公がその部隊で目をつけてくれるのであれば、こちらも向こうに奇襲を一旦仕掛け織田本隊の救助をしやすく出来ると思われませんが如何ですか？」

私が蝮殿に案を出すと、何か考え込む様子で我が手勢を見るも何か腹黒い事でも考えてるかの如く妖しい笑みを浮かべて縦に首を振る。

「……………頭もなかなか切れる若僧よ。真、主が敵で無かった事こそが幸運じゃわい」

「……………誉めたところで何も出ませんよ」

「それは、残念じゃ。じゃが、主の策……………この蝮がしかと見定めてやるとしよう」

「何を考えてるか解らぬ御方ですな。ただこの様な戦はあまり好まぬゆえ本音は、退却させたいものですが……………まあ、あの小娘達にはいい経験になるから良いとしましょう」

道三公がニヤリと笑うのに、こちらも笑みを浮かべた後、馬に跨がり私は、平八郎とヤスを前にさせ織田本隊を囲む美濃勢の様子を伺いつつ道三公率いる少数部隊が松明を片手に持たせ霧の中から数多の火が目だったのを合図とした時

私の足輕部隊は、一気に駆け足で抜刀をさせたまま目の前の斎藤勢に奇襲をかける。

「……………本多平八郎、参る！！」

「……………相変わらず見事槍さばきだな。さて、腕に自信がある者はこちらも相手しよう。但し、あの者より無惨な死に様になるだろうがな」

向かってくる数多の兵達を真つ二つにするよう振る平八郎に対し

ヤスは、向かってくる者達の喉仏を突き刺したり時には跳ねたりと彼女の槍は、敵兵の首を花火のよう時々跳ねているのが目立つ為

美濃の兵達は、次々と彼女から逃げていくが、軽装な鎧を装着してるにも関わらず蜻蛉切という前田殿やヤスが持つ槍とは段違いに長さが一回り長かったり穂先が横に広く先が鋭いその槍は、戦国〇双の本多平八郎忠勝が愛用するのと殆ど瓜二つで身長が低い彼女が軽く振るうよう扱ってただけでも化け物と抜かして逃げ去っていく槍兵など目立つが

遠距離から構える鉄砲隊が彼女を狙うも平八郎が勢いよく蜻蛉切を

一振りするだけで放たれた鉄板玉は、地面に落ち

周囲にいる兵達ですら彼女の無双振りに震えが目立っていた。

「敵も引き際を見せている！！全軍、警戒を怠るな！こちらでも退却する！！さてと、この判断で間違いないですな」

「ふむ。正解だ。さて、我が軍は、これ以上戦っても無意味だ！！清洲へ退却する！！」

以上、大した軍義も聞けず仕舞いな上、織田様からただ五百余りの兵を預けられただけの私は、まだ向こうに警戒されている事だと認識する。

そこは、無理も無いのだがこの戦いが終わり屋敷に戻って休もうとした最中にて前田殿を連れて来た相良殿が、この屋敷に入る。

「よお！今日は助かったぜ！！」

「……………ただ、信奈様の機嫌悪い。本隊と別れるのは良くない」

「それは、そうだろうな。私も左近殿の采配には肝を抜かした。だ

が、冷静に考えれば貴公等の大将が迂闊に深追いせねばこの様な対応をこの方はとらなかつたでしょう」

「……………それは、私達に危害あるという事？あまり言い過ぎると許さない……………」

「ふつ、自らの誤りは認めんか……………戦場で、油断は許されん。今回の織田様は道三公すら恐れる竹中半兵衛の策に引き込まれたに過ぎん。それ故、道三公は相良殿の部隊を借りてまで出陣したのでしよう。違いますかな？」

ヤスが今回の戦で自らの兵を道三公へ貸した相良殿に意見を聞くと彼は渋い顔をしたまま縦に首を振るうが

あまり辛気くさい話が苦手な彼は、なるべく場を明るくしようとす
る為、その話を逸らそうとしようと私の自室を眺める。

「まあ、その話ここまでにしようじゃねえか。それより、左近さん
つて美濃について何か知らねえか？それに、お前さんが他国の事に
敏感だとかつていうのを清洲同盟の後に元康から聞いてたんだが…
……………」

「……………主君だけでなく同盟国の大名すら呼び捨てか。人にものを訪ねる態度にしちゃ悪すぎる。それに、功を焦って汚名挽回か何

か知らんが…… 大方、道三公が語った竹中半兵衛とやらにでも見てくるか。まあ、どんな訳にしる私は、何も語る気御座いませぬ」

「…………… なんだよ。ちょっとくらい教えたってそつちは損をしないだろ」

相良殿がしつこく私に物を頼み続けると近くにいる平八郎が彫り物で使う短刀を彼の喉仏に近づけ無言で睨み付ける。

「…………… 左近に馴れ馴れしい。左近は、最近疲れ気味…………… それも察しないでしつこくするのは許さない」

「それは、私も同意だ。左近殿は、三河から貴公等の力になる為という事で御館様の命でこちらへ赴いた御方…………… いくら、我が御館様が織田様に齒向かえんからと言ってもその家臣の都合まで気にする謂れは無いという事くらい理解して頂きたいものだな」

「だがな！！元康はお前を送ったのは信奈の美濃攻略に必要な奴だからって言ってたんだ！！それに、お前なら一國を奪う知識人だとも聞く！ならその力を俺にも貸してくれても良いと思うぜ！」

「ちよつとばかり出世して成り上がったのを機にでかく出たもんですな…………… 猿が！美濃へ行くなら行くが良かろう！！御館様を盾に左近殿の協力を仰いであるようだが、そんな脅迫めいた事ですら協力

を仰ぐのなら、この康政が直々に貴様を放り出す！！」

平八郎の短刀に続き、ヤスまで槍を向けようとした瞬間

前田殿が無言で睨んだままヤスの突きを槍で抑え込むと両者の睨み合いが劇化し暴走しかねんと読んだ私は、ヤスと平八郎に武器を納めるよう指示をしながらも相良殿を睨みながらも一旦目を閉じて溜め息を漏らす。

「まあ、我が姫様の名を出された以上……………迂闊に断れませぬゆえ今回は仕方がないと致しますが、次に姫様の名を盾にした時、ただで済まされぬと覚悟なされよ」

「……………左近の腕、本物。お前を斬り込むくらい……………雑作もない」

「……………これは、良晴悪い。本多左近と同じ立場なら……………殺めた
い」

「……………わ、悪かった。だ、だがこれはやり過ぎじゃねえか？」

相良殿が、己の発言にそこまで問題が無いんじゃないかとも考えてたのに私は彼から感じる子供臭さに苛立ちを抑えるかの如く鞘に

納まっている刀を抜かないよう意識する。

だが、刀の鞘を握る手がフルフルと震えが止まらないのに気付いた平八郎とヤスに勘づかれ

その手をヤスが握り震える我が身に平八郎が後ろから包み込むよう抱き締める。

「……………相良サル晴。今日は帰る。でなければ、危ない」

「ど、どういう事だ？俺はまだ話が終わってねえぜ」

「……………貴様には、左近殿が抑え込む殺気を感じられないのか！？このままここには斬られるという事だ！！」

「……………相当、危険。ここは良晴。退くしかない」

「だ、だが……………このままじゃ信奈が危ないんだ！？お願いだ！力を貸してくれ！！」

相良殿が必死に頭を下げるが、今の私には刀を抜かないよう意識するのに精一杯だった為

それを察する前田殿が無言で頭を一礼した後

相良殿を引っ張りながら私の前を去っていく。

そして、私は彼が去ったところを確認すると急に全身の力が抜けた
思いで眠りに入った。

翌朝

私が起きた頃には、何故か平八郎に抱かれたまま眠っており鞘を握
つてた手を握ったままスヤスヤと寄りかかって眠っていたヤスがい
た。

「……………朝か。あの子供臭いアホは、今頃清洲を出る頃合いかな」

「……………ん。あの猿、気になる？」

「さて、どうかな……………だが、織田様が美濃を奪えねば西の守りは
手薄同然となるか。そろそろ、あれの話でも進めてみるか」

「…………あれの話とは、左近殿が考えた墨俣へ城を築く策でありま
すかな？フフ、思った以上に鬼な方ですな」

「…………左様。とはいえ、直接的に織田様に話しても向こうはその
事がお見通しな筈。ならば、こちらは織田様に忠義で純粋な方にこ
の案を持ちかけてみるとしましょう」

八丁味噌が入った入れ物を片手に私は、柴田殿の屋敷へと向かつて
行った。

次回予告

「今回は、相良殿が幼女軍師を口説きに行った為、柴田殿に代わり
を頼ませて頂きますぞ」

「え？アタシでいいの？それにしても、次の話で姫様があんなに驚
く顔なんて初めてみたぞ!？」

「まあ、今まで槍一筋だった御方が急に築城の話をしたのですから
誰しも驚くでしょう。次回、勝家の築城お見逃しなく!」

「……いや、殆ど左近殿の築城にしか見えませぬがな」

「……………康政と同じ」

「くうううゝアタシだってこれくらい出来るんだからな!？」

第四話勝家の築城（前書き）

最近、前書きを書くのにネタがありません…（^| ^ ;）

さて、どんなネタを考えましょうか……

？相良良晴との漫談コーナー（次回予告でよくやってますけどね）

？毎回、誰かキャラを決めてそのキャラの一言でも聞く

？何か、リクエストコーナーを通る

……など考えております。

第四話勝家の築城

相良殿が美濃へ行った朝

私は、平八郎とヤスを留守にして一人八丁味噌を片手に柴田殿の御屋敷へと赴いており

当初は、先的美濃攻めの事で説教を食らったものの

謝罪の意として、三河特産の八丁味噌をお土産として渡すとうにか機嫌が落ち着いたにも関わらず何か警戒してる感じが見られていた。

因みに、柴田殿の胸が忠次殿と同じくらいある事に目が泳ぎそうなところは、ヤスや平八郎に見られなくて済んだと内心思っていたりする。

「そういえば、本多左近とかいったな。お前、アタシに何か用があったきたんじゃないか？」

「ええ、美濃攻略の事で少し案が御座いまして……それには、是非柴田殿の武勇が必要不可欠かと思つた次第にていざ候う」

簡略化した地図を提示すると柴田殿は、何か険しい顔でその地図を眺めていたので

私は、その地図に載っている”墨俣”という地に指を指す。

「まあ、ざっくり言えば今回の策はこの墨俣という地にて築城して貰いたいのので御座いますよ」

「はあ！？こんな美濃と国境なとこに城なんて築ける筈無いだろ！
！もう少しまとめた案をだせよ！！」

「だから、まだざっくりとしか言つてませぬぞ。もう少し具体的な策としてはこの長良川を利用して材料を流す手筈とて私が織田様より預かつた部隊の内七、八十名をそこらの民として紛れ込ませる予定です。それに、相良殿がたまたま美濃へ行くご様子だと噂されており、ここに来る前見かけたおりには留守をなされてた義妹様からお聞きした限りですと前田殿と行かれたとか……まあ、大方斎藤家の軍師殿でも見に行ったのやもしれませぬが、ここで、相良殿だけが目立つというのも如何なものかと思ひまして……ただ、御迷惑でしたら即座に退散させて頂きます」

私が柴田殿の前で頭を下げて一礼し、床から立ち上がろうとした瞬間

普通の女性では、考えられない馬鹿力で腕を掴まれた私は、痛みに耐えつつ彼女の前で再び座り直すと柴田殿が何か真剣な目付きでこちらを睨んでいた。

「よく分からないけど……お前が考えている美濃攻めの準備が出来ているっていう事でいいんだよね!？」

「……………そうなりますな。後は柴田殿次第かと。因みに、詳細の策はここに述べておりますゆえ、是非お願い致します」

「そ、そうか。ま、まあ……本多殿が折角用意したもんだ。あたしで良ければ協力してやらんでもない(これで、姫様にお褒めのお言葉が頂ければこの勝家それこそ一生の誉れだ)」

「有り難き幸せに存じ上げます」

その後、柴田殿に策の詳細を説明すると柴田殿は、かなり気合いを込めた感じで清洲城まで向かい織田様に全ての話を伝えたところ

直ぐにも二千の兵を頂いたらしく織田様からもかなり驚きが隠せないでいたらしいとの事らしい。

その後、織田様から与えられた兵の内八十人きらいの兵を長良川へと向かわせ尾張から逃げ出した民という設定で平八郎に指揮を任せ

二千の本隊指揮に柴田殿、三百の別動隊の指揮にヤス

そして、私は柴田殿の推挙として本隊の副将を任される事となっております
おり

昼間に墨俣へと着いた二千の兵の内、五百の兵を預けられ周囲の警戒に目を光らせ

平八郎の部隊から流れる長良川から流れる木材に織田様から託された木材で城を築城する柴田殿の意外なる見事な采配に私は、内心驚いていたが

三千余りの斎藤勢が夜襲を仕掛けた頃、この時私が練った策は見事に的中し

築城中の城に近づく斎藤勢にヤスの伏兵部隊が横槍を入れ陣形が崩れたところに私の部隊が突入する。

「行け！行け！行けえええ！！今の美濃の部隊はこの程度の策にはまっている！ここが、正念場だ！！全軍、本隊に斬りかけえええ！！！」

「……………あれが、本多左近とかいう奴の力かよ。姫様の為にこの城を完成させたいがあたしもあいつと戦いたい！！あああ！！戦いたい！でも、姫様の美濃攻略にこの城を完成させなきゃいけないし……………」

「柴田様、こっちは人手が足りてますから大丈夫っすよ！！！」

「むしろ、城といっても皆みたいなもんだが櫓に塀や城壁も殆ど完成してきやしたから大丈夫っすよ！！！」

「悪いな。じゃあ！あたしもちよつと暴れて来るから後は頼んだ！！！」

私のところで柴田殿が五百余りの騎馬隊を率いてこちらと合流するという情報を聞いた頃

柴田殿の騎馬隊による暴れ振りにただ啞然とするしかなかった。

また、この女性から放たれる殺気こそが鬼柴田と言われる由来なの

かと考え込むところに柴田殿が笑顔でこちらに目を合わせていたのに私はどうすればいいのか苦笑する。

「あたしの事は権六で構わない。あたしもあんたを左近って呼んでいいか？」

「はあ……………構いませぬが、今は崩れてる陣形を崩しております。そろそろ兵を退き織田様に本隊の要請を試みては如何でしょうか？ここを征するだけでも美濃攻略は一気に進めやすくなりますゆえ……………」

「うん。ちょっと暴れ足りないが、左近が言うんなら良いだろう。お前のお陰で墨侯の城もほぼ完成だ」

「ふふ、柴田殿のお力あつての武功ゆえこの美濃攻めで貴女に対する織田様の評価も急上昇でしょう」

そして、丸一日かけてようやく翌日の朝方に完成した墨侯城に織田様が機嫌良くやって来た昼

浅井殿も美濃攻めの援軍という形で兵を率いていたが、何か氣にくないかのようにこちらに目をつけていたのを私は、無視したまま城

の櫓に登って休んでいた。

「……………左近、無茶し過ぎ」

「まあ、何ゆえ忠次殿が貴公を気に入ってるか分かったような気も致しますが……………左近殿のやり方は、あながち楽ではありせぬな」

「ハハッ、でなくては向こうの信頼なんて簡単に買えんよ。それに奉公尽くすというのは、こういう事だと貴女達には実感してもらいたいのだよ」

「……………なるほど。その為に忠次殿が御館様に助言し、私達を貴方に託した訳ですか」

ヤスの質問に私が縦に首を振ると、彼女はやはりなといわんばかりにこちらに目を向けるかと思いきや

ヤスと平八郎から権六殿と二人きりに何があつたかしつこく尋問され

説明する間、ろくな骨休みが出来ずにいた。

次回予告

「まさか、あの勝家が城を築くなんて想像出来ただけだど……………」

「それは、こちらなのですが……………まあ、案を出して支える側も大変だったという事です。そういえば、そっちは口リっ娘軍師殿を口説けたらしいですね」

「……………その言い方、勘弁してくれねえか。まあ、こっちは五右衛門に半兵衛ちゃんと仲間が増えて助かるけどな」

「だが、大した禄が貰えねば配下は養えんぞ？とはいえ、こちらら二人を養うのに毎月の禄が半分に減給中だ。全くこれ以上増えたくないですよ……………お陰で最近目を付けていた刀が買えんませんし」

「何を言ってやがる。刀なんてそこら辺にあるじゃねえか？」

「流石、女盛りな猿なだけに身を守るものには疎いですな。さて、話に慣れない猿は置いとき次回予告といきましょう！次回陥落、稲葉山城！こうお見逃し無く」

「ちっ、今回はなぜかツツコミが出来なかった……………」

「いつその事孕ませ炎の暑苦しい猿顔な未来人と題名を変えちゃえば……………」

「おい！！俺を何のエ○ゲー主人公にしてんだよ！！というより、テメエは俺を何だと思ってやがる！！」

「女盛りで後先考えない上に命知らずな阿呆な身の程を知らない猿野郎といったところだな」

「何、全くメリツトを語ってねえよ！！この人！！」

「ああ、後お調子者といったところか。強いて利点を述べれば他人に優しいとだけでそれが甘さだと気づけぬゆえ甘ちゃんだの餓鬼だのと酒の肴で使えるのですけどね……………」

「おいしい！！他人のブライバシーをネタに使っくんじゃねえええええ！！」

「さてと、次回もよろしくお願い致します」

第五話陥落、稲葉山城（前書き）

「いよいよ、この明智十兵衛光秀の出番も近いですね!!」

「ねえ！？相方誰か違う人にして!!」

因みに、原因は次回予告に隠されております……………

第五話陥落、稲葉山城

墨俣での一件以来、権六殿は織田様より次の稲葉山城攻めで先鋒を務めるよう命じられたらしく

その日の晩、かなり嬉しかったのだろうか人が八丁味噌を具にした焼きおにぎりに味噌汁、沢庵を晩飯に頂いてた頃

酒を片手に長屋の扉が外れるくらいおもいつきり開ける権六殿が現れた。

「その握り飯と味噌汁をくれないか!？」

「ちょっとお待ちください。ただ今、用意致します故……って、人が口つけた飯をなに食べてるんですか!？」

「い、いや……悪い。それにしても、こんな握り飯、初めて食ったぞ!」

「……大胆過ぎ。まだ、左近の食べかけ……狙った事無い」

「ふむ。我等ですらあそこまで出来ませぬ。流石、柴田殿ですな」

ヤスと平八郎が何か権六殿を羨ましく見ていたが、とりあえず見なかった事にしようと考え多目に飯を食べる平八郎の分に用意した釜に入ってるご飯をお握りにして一人、台所で食事を済ましている最中

居間で旨そうに人の飯を平らげる権六殿が織田様に墨俣での一件で誉められ稲葉山城攻めでも先鋒を務めるといふ何度も聞いた話をまたし始めてたのに聞きあきた様子で陰で溜め息を漏らす

その後、側役に私の名前が挙げられ私は、思わず咀嚼していた握り飯を喉に詰まらせそうになり慌てて予め用意していた水を思いつき飲み干す。

「し、柴田殿……………何故、私なんかを側役に！？私はずきり織田様の弟君であられる津田勘十郎信澄殿かと思つてましたが……………」

「ふむ。まだ御会いになつた覚えは御座いませぬが、私もその方かと思つておりましたぞ。ただ一門の方ならば、何も功を上げなくともそれなりに地位が安定するでしょうが……………織田様はそういう甘い方では御座いますまい。ならば、ここが武功の稼ぎどころかと思ひます」

「まあ、あたしもそれは考えたんだけどさ。あの御方は、からつきし戦で戦う事も出来ないんだよなあ……その点、左近は頭も働くし剣も今ここにいるあたし達程じゃないにしろそこの奴等より戦えるし、指揮も出来るだろ？だから、客将のお前には悪いけど姫様に嘆願して御許可だけでも受け取ったんだ」

「……………その訳分らないでもない。でも、太刀筋なら前田犬千代がいる……知略なら相良サル晴を使えばいい」

「犬千代が抜けたら姫様の身を守る奴がいなくなるし、猿はあのいやらしい目が苦手だから勘弁してくれ」

権六殿が必至に頭を下げられ私は、溜め息を漏らしながらも承諾し、その代わり平八郎とヤスにも参戦させて頂く事を条件に加えさせる。

そして、相良殿が竹中半兵衛殿を連れ清洲へ戻った時には

最早、織田様が戦支度をしてる最中にて彼は、五百余りの兵を率いて出陣し稲葉山城まで出陣する。

また、竹中半兵衛が相良殿の配下に寝返ったと知った西美濃三人衆が織田側へと寝返ったのはいいが

稲葉山城は、思ったより堅城なせいかな今の私は、ただ金華山から見える天守閣を眺めているだけであった。

「……………早々に落とさねば、この兵も疲弊するだろう。さて、どう乗り込むかな」

「なあ、一気に力攻めとか出来ないのか？」

「出来なくも無いでしょうが……………織田様は、この美濃を平定すれば六角家が治める南近江に三好・松永が占領下に置いている京の都を目指すのにもあまり疲弊はさせたくないと思われそうです。とはいえ、私は次の戦くらいは三河に帰って東の武田と対峙する為に遠江を統治せねばなりませんからな……………」

「……………そうか。苦労するな」

「まあ、そんな話は置いとき今は美濃攻めに集中しとかねばなりませんかな……………」

美濃攻めが終われば、次は遠江を占拠し駿河・甲斐・信濃・東上野と領土を広げる東の大大名武田信玄からどう松平家を守らせるか頭を悩ます。

また、主君の家と手を組む織田家に力をつけさせて頂かねば三河より西の勢力を抑え込む手が無いが、織田と手を組んだ事により武田とぶつかるのを必定と頭の中で結論を出しながらも未だに落ちない稲葉山城を眺めていた時だった。

相良殿の配下にいる竹中半兵衛が稲葉山城までの隠し通路を彼に報告し、相良軍が織田本隊と美濃の部隊が睨み合ってる隙に隠し通路から城内へと忍び込み

目の前にある城門が開門したところを織田本隊が織田様が号令の下、力攻めで本丸まで追い詰めており

私達が本丸付近まで辿り着いた頃には、未だに抵抗する数少ない義龍の手勢が鉄砲を構えて本丸の城門は開門されており

織田様が、義龍の命を奪わずに彼を美濃から放逐させていたところが目に映っていた。

「……………あの男。いつか織田に復讐する」

「あの猿を飼い慣らす御方だからもしやと思っていたが予想通り甘い御方ですな」

「…………ふむ。それで、武田とも戦う姿勢を持つというのだ。忠次殿も頭を悩ますであろうな」

「…………でも、何だかんだで左近もお役御免。ようやく三河に帰れる」

見事に陥落した稲葉山城を眺めつつも本隊からの伝令から天守閣にて待つとの命が下され

その後、平八郎とヤスと共に彼女の下へ赴くと

そこには、全ての話し合いを済ませ一人で城下を見下ろす織田様が待っていた。

「此度は、おめでとうございます」

「そんな堅苦しい挨拶は抜きにして。今回は、あんた達が裏で六を利用していたお陰でこっちはあまり兵を失わずに済んだわ。まずは、助かったわ。あの時、六に兵を無暗に動かさなかったお陰で思った以上に兵力も温存出来たのに最初は驚いたわよ」

「まあ、織田様の事ですから京へ上るのですしたら、そろそろ近江を

攻略すると考えておられましたからな……………」

「デアルカ。それは、助かったわ。後、貴方達には三河の竹千代に返したいんだけど……………左近、貴方が読んだ通り次は六角攻めを行うわ。だから、竹千代にも無理を言って万千代に使者をたてて貴方達を京の上洛まで伸ばす事にさせてもらうから今後も六だけじゃなく万千代の補佐役としてもお願いさせて貰うわよ」

こうして、織田様から期間延長みたいな形で美濃に居る期間が延びた私達は、ただ頭を下げるだけで織田様の要求をのむ形となり

三河へ帰る期間が延びた代わりとして美濃で屋敷を設けてもらう形となる。

因みに、その屋敷の近くには権六殿が住む予定の屋敷があるときいた私は、当分静かな飯を食う事が出来なくなるだろうと予め予想していたが

これが、真となるとは予想すらしなかったのは言うまでもない。

また、織田様からのお呼ばれが済みこれから人が折角休もうとする憩いの長屋で祝勝会を開くと騒いでいた権六殿の要求を思い出していたので、織田様から頂いた褒美の金で米と味噌を購入するよう頼み私は、へそくりで貯めておいたお金で秘蔵の酒を購入する為

道三公から密かに教えてもらった酒屋に着いた頃

姫様が数名の供を連れて美濃へと赴いていたところを見掛けると

姫様は、こちらに手を振って合図する。

「左近さ〜ん、お久し振りです〜」

「お久し振りで御座います。姫様。また、半蔵から三河の一揆を治めたとかお聞き致しましたが、おめでとうござりまする。次は、いよいよ今川残党がおられる遠江を平定する事でいよいよ武田と本格的に事を御構えになりますな」

「そうですね〜それで、忠次さんも左近さんがいち早く戻ってくれば助かる事も言っていましたか……吉姉さまの命で残る事となったのは残念です〜」

「まあ……向こうに戻った際は、武田とやりあう事ばかりに事を構えるより相模の北条とも不戦同盟を考えねばなりますまい」

「そこは、行けそうな方々も手が空いてませんので、左近さんが吉

姉さまの上洛にご協力し終えた後に頼みます」

この時、私は姫様の前で余計な事は吐くものでないと後悔し

背後にいた半蔵の方に目をやり溜め息を漏らす。

「（忠次殿と並ぶ二大苦勞人も御手上げというところか）」

「（……………何とも言い返せない別名ですな。因みに、貴公の見立てでは、平八郎とヤスですが……………姫様の下に置いとかせて下さらな
くても宜しいのですか？）」

「（……………武勇ならば、俺やお前が如何なる部隊を率いて束となつても相手にならん無双ぶりだろう。だが、戦で采配を振るうとなれば俺は、左近と忠次殿さえいれば良いくらい実戦経験が少ないと見る。悪いが、まだまだ面倒を見る必要性はあるな）」

「（自分が御世話になった時は忠次殿がみてくれましたが……………いざなってみると気が重いですな。）」

そして、姫様に気付かぬよう半蔵と小声で会話を済ませた後

私は、姫様に頭を下げ屋敷へ戻った。

次回予告

「原作で言えば2巻も後わずかと言ったところですが、3巻目に突入しいよいよあの金槌頭の者と御対面します。はあ……………」

「誰が金槌頭ですか！？私には、明智十兵衛光秀という立派な名前があるんです！！いい加減、人の名前を覚えて下さい！」

「ハイハイ、ったくなんで相良殿がいきなり貴女に譲ったんですかね……………ここは、私こと左近重忠と相良サル晴殿が定番としたコーナーみたいなところなんですが……………まあいいや」

「こちらだつて忙しい日の中時間を作ってるんですよ！？後、今回は”あなた自慢”という題で何か自慢する事がないか聞いていますよ？で、冴えない顔した左近殿は何か自慢する事あるのですか？」

「……………いや、冴えないは無いでしょう。ただ、特に自慢する事は無いですね。そういう明智殿は、何かありそうですね。（ちっ、他人の自慢話なんざ聞きたくないですわ）」

「よくぞ聞きましたな!! 血筋が土岐源氏の流れだつたり、鹿島一
刀流の免許皆伝・足利將軍に仕えていた経緯もあります! 他にも…
…」

「いや、もう良いです。それより次回予告に移りましょう。次回…
……」

「次回、明智十兵衛光秀と京へ上洛! です!!」

「くっ、始めて予告を取られた……………」

「それにしても、この光秀がより活躍出来るところとしては良いです
ね! 今後もこの十兵衛光秀をお願い致します!!」

「うん。相良殿みたいな弄りやすい人間が良いな……………と言っても
何か題がないとこの人と語れる気がしないんですが……………」

「大丈夫です!! それも、この十兵衛がおれば怖いもの無しです!
なので、後書きすらいらないでしょう!!」

「（嫌あああ!!）。。…（）」

第六話明智十兵衛光秀と京へ上洛（前書き）

「本多左近も次回から何処に行く予定ですし、いよいよこの主人公の座も十兵衛のものとなりますな!」

「いや、いくらどんな話に流れようともそれは無いです」

第六話明智十兵衛光秀と京へ上洛

世の中、何とも退屈な事もあるものだ。何せ、支城を落とす際にたった一人火縄銃の扱いに慣れてる奴が交渉という名の脅しをしたただけで阿呆な大将格の奴等が次々と降伏しているところを聞く側は、ただ欠伸をしながら馬に乗ってるだけだというのはこの世界に来てから初めてだろう。

とはいえ、美濃の拠点を稲葉山から岐阜に改名し天下布武という旗を掲げるようになったり、北近江の男装してまで家督を父親から奪った隠れ姫大名に女装趣味の弟君であられる津田勘十郎信澄殿を嫁という形で嫁がせたと聞いた時には爆笑せん事に必至であつたし

今の六角攻めも急過ぎる気もしたが、当主である六角承禎も居城である観音寺城から甲賀へと逃げ出した為

六角家は、事実上滅亡してしまった。

その後、まっすぐ京へ兵を進める織田勢の勢いと姫様の援軍を見掛けた時

私の役割は必要無いのではないかと些か疑問を抱いていた。

「……………全くこの様子だと我等は必要無かったですな」

「……………言つな、君達はこの後すぐにも姫様と三河へ帰れる筈だが、こちら武田の領内へ忍びつつも相模まで向かい相模の北条氏康殿と御対面せねばならんだ」

「……………危険」

「うむ。左近殿が頼られておるのは、分からなくもないが……………此度は、些か無理があり過ぎますな」

「……………とはいえ、話をしてみねば分からぬ勢力だ。今の松平家と相反さんかもしれんが何事もやってみなくてはならん。はあ……………」

私は、ただ溜め息を漏らしつつ京の宿場で一晚過ごす為の賃金を支払い案内される部屋に着くと横になり、ゆっくり休む事にした。

その後、のんびりと身体を休める時間を過ごしていた私だが

突如、宿屋の主人が私宛に客人が来たからと通したせいか

私の憩いなる時間は、線香花火が散ったの如く呆気なく終わり

その代わり、金槌頭の少女が何か真剣な表情でこちらに現れる。

正直、こういう人に限って相手をするのが苦手な私は、主人に茶を一杯用意するよう促すと金槌頭は黙ってその茶を頂く。

「金槌頭殿ですか……全く明日、相模まで早馬で行く人に対していい覚悟ですな」

「何度も申しますが、そのあだ名止めて貰えないでしょうか？突然なる御無礼申し訳無いと思っております。ただ、今回は本多左近殿にどうしても御相談が御座いまして……」

「ん、如何なされた？特に明智殿なら問題なく何でもこなす御方に見えますので、こちらは、何も言う事無いと思われませんが……」

「いや、それはそうなのですが……本多殿は、今川にお仕えしていた御方だとお聞きしておられますので、何か今川殿と御対面する際、注意せねばならぬ点とか無いか確認したい次第でちよつと御相談に乗りたいので御座います」

目の前で明智殿が頭を下げると私は、溜め息を漏らしながらも彼女に今川義元に対する扱い方をそれとなく語り

明智殿は、そんな私の話を真剣な眼差しで一言一句漏らさないかの如く聞いていたせい

語ってる側であるこちらは、昔あの姫に振り回され北条との親睦を深める際

駿河まで御呼びして茶会を催した過去話まで語ってしまい

気づけば外は昼間だった筈が夕方くらいになっており日が西に傾いていた。

「……………と足利將軍家に御仕えしていた貴公ならば何も問題無いかと思われませんが、あの御方は茶を御好みになられます故、御用あらばそれなりの高級菓子をご用意なされば、問題無いでしょう」

「……………意外と御苦勞なさってるんですね。まさか、北条氏康殿も似たところがあったとは……………」

「ただ、北条殿は御自分の身体を気にする御方ゆえ胸の話は厳禁で

すからそういう面では、下手に権六殿みたいな御方を向かわせれば面倒な事になりますな……………因みに、今川殿の前では、何があつても軍学・兵法・石高などの話はつまらないと飽きられる故、気を付けて下されませ。とはいえ、屋敷の話に持ち込まれれば無駄に資金が消え去る恐れがあります故、何か大事なる話の場合、口封じの策としてあの御方には黙つて源氏物語や伊勢物語を読ませておけば問題無いと思われませんが……………まあ、そんな事大事なる話の前では出来ませぬでしょうが……………後、あの御方の悪いところは退屈しようがない時こそ何処かお出掛けなさりますから油断も隙もあつたもんじゃないですよ」

「……………分かりました」

それに加えて蹴鞠なんか出来たとしてもご機嫌をとるのが当たり前だと今川義元にお仕えしていた頃の話を終えた時には

主人が夕食を用意して来たので、明智殿の分も払う羽目となるが

まあ、多少なりとも気を使う本人には京の御上洛まで一働きした事もあつたからと誤魔化したのだが、何分、たまには、高い宿屋に泊まるのも良いかという自分の甘さを呪いたくなる。

「そういえば、明日は相模まで大丈夫なんですか？駿河も武田領になつた今、下手に東へ行くのは危険かと思われませんが……………」

「何分、相模の小田原は城の規模が規模ゆえ町が荒らされる心配が無いせいか、意外と景気も良いのですよ。それに、駿河だって関所が面倒なくらいでしょうが、私みたいな冴えない人間って何らかの浪人みたいにこの様なちよつとボロボロな服を着るだけで気付かれないんですけどね」

「……………なるほど。確かに本多左近殿は仰る通りの御方かもしれませんが」

明智殿が悪気も無く私が旅で着る衣服を何か懐かしそうに見つっこちらに顔を向け何か納得するような素振りを見せた為か

何か怒りたくも怒れない私は、ただ”ほほう。”頷きながらも怒りを抑えるよう暑い茶を頂いていた。

その後、明智殿は此处へ来る前まで相良殿が関白近衛前久殿に面倒事を起こしたせいか

実は、此处に来たのも本来は愚痴を吐きたかった為らしいが

吐く相手もなく最終的に私は寝る間も惜しみ明智殿の愚痴を聞かされ一睡も出来なかった。

その翌日、朝から眠気が酷い私は、昨晚酒で呑み二日酔いとなっている明智殿を残し

一人、京から駿河までの旅が始まる。

次回予告

「何故、この十兵衛が宿屋で一人、ぐっすり寝てたのですかあああ
あ!!!」

「いや、貴女が愚痴をこぼしながら酒を頂いたからでしょう。お蔭
でこちら別室まで借りてお金が厳しかったんですよ!？」

「アハハ……ですよね。旅をした経験があるから分かります。さて、
今回のお題と話を移させて頂きますが、お題は、あなたが経験した
苦労話という事に致しましょう。因みに、最近の苦労話といえば……
……今川義元を征夷大將軍の任に着かせる手筈でしょうか……
本来なら足利家の義昭様という幼子に着かせる手筈にするまで苦労
しましたよ」

「あれは、無理があり過ぎましたからね……………ただ、相良殿も最初から余計な手を打ち過ぎなんですよ。いくら乱世とはいえ大名が美女なら命を奪わんってそれが刺客だったとしたら同じ事が言えるのかって思いましたもん。それに、原作じゃ武田信玄殿の命すら救ったような形でしたからね……………素直に甲賀の出である善住坊つつ鉄砲の名手に狙撃されてたらなあ……………」

「……………この作品でも武田と戦うんですね」

「そうなのですが、それ以上仰るとネタバレになりますからね。さて、次回ですが……………」

「”左近、北条に降る”ですか……………内容的に、チラッと見ましたが今回より原作無視な上に天下無双の剣豪少女を配下にしてますね。しかも、黒髪のところがモゲーの戦コレクションの人物と若干被ってますが……………」

「……………気のせいでしょう。因みに、気付く人に気付かれたらネタバレになりますけど。では、次回もよろしく願いします」

第六話明智十兵衛光秀と京へ上洛（後書き）

とある小田原城の一日

「いよいよ、この北条氏康が出る幕が増えるわね。本当、最近の話はどれも胸が大きいか小娘なんか惚れる男達が多過ぎなのよ。そのところ貴方も思わないかしら？」

「…………さて、たった数ページしか出てない御方が言っても六巻を読んでもない方には想像出来ないかと」

「そんなのどうにでもなるわよ。それより、次回から」胸なんてただの飾りよ。大抵の男共にはそれがわからないから外道なのよ”って何処かの台詞で呟くところも貴方の記す書物にいれるか考えときなさい。後、”何でも戦って得るなら苦労しない。虎にはそれが分からないのよ”っていうのも捨てがたいわ」

「いや、冗談ですよ……」

「さて、どうかしら？後、”女を見ると胸板かどうか気にするなんて男の屑”っていうのも良いかもしれないわね。後、三河の小狸

が魔法少女になる話なんて一部の者達が欲情するかもしれないわよ？」

「……………氏康様、小田原城内だと何でも言い放題なんですね」

「何を言ってるのよ。そんなの当たり前じゃない。最後に”駿河なんて欲しくはくれてあげる。だけど、それで図に乗れるのも今の内よ”っていうのも捨てがたいわ」

「……………甲斐の虎がいなけりや意外と言いたい放題なんですね」

第七話左近、北条に降る（前書き）

気付いたら七話まで話が進んでますね……

さて、原作と離れた話ですがよろしくお願い致します。

第七話左近、北条に降る

京の都から美濃まで徒歩で数日かけその後、美濃で馬を買い東海道を
を経て相模まで着いた頃

私の着物は、既にボロボロとなっておりその経緯も伊豆で炉銀を使い
果たした剣客相手に旅の供をしたのが原因だったりもする。

「いやゝ悪いね。見ず知らずなのにここまで飯の世話になるなんて
思ってもみなかったよ」

「まあ、それは良いのですが……一刀斎殿。一応、言っときますが
私は剣客を雇う気は御座いませぬぞ」

「何、冴えない顔してケチな事言ってるだよ。あたしとお前の仲じ
ゃん。気にするなって！」

私の隣りで飯をたらふく食っている腰まで長い黒髪を後ろに束ね紅
のような紅い目が目立つ十代後半くらいで身長が百五十くらいあり
そんな胸が発展途上というより殆ど板に近い少女を伊豆で拾い、旅
の供みたいない形で冴えない顔した男の金で飯を食うのが趣味でない

かと内心疑ってしまったりするが剣の腕だけは化け物並で

会って間もなく勝負を挑まれ服をボロボロにされた事は、置いとき賊が何人来ようと怯むことなくたった何振りかに見えるくらいに速さで数人の賊をあつという間に仕留めたり

他の剣客に絡まれても生かす事無くものの数秒で相手を仕留めるくらいの腕でもある。

ただ、何故だろうか。人当たりが特別悪くもなく良くもないのにも関わらず時々、変な人に出会つと災難な目に遭う自分の性質に時々、嫌気を感じる時もあり

全てにおいていい加減になりたかつたりもするが、今回ばかりはそうもいかないと考えていた私は、目の前でボロボロな着物を着こなす伊東一刀斎殿には、何か新しい着物でも買いたいところだが

北条氏康がいる小田原城は何かと警備も厳しいので、ただ訪れるだけではすぐ追い出されたりするので、姫様直筆の文では信用ですら信用出来ない為

この時だけ相良殿に内心感謝しつつ今川義元が仲裁人として証明する文を向こうに提示すると中へ入れたのもあり入るのには時間がかかったが

城内で氏康がいる部屋まで案内して頂く際から何かと周りから殺気を感じるのだが、一刀斎殿が何事も無く歩いていたところを見ると何かと頼り甲斐があるせいかな

こういう時こそ彼女がいて助かると思っている。

「それにしても、左近つてよくこんな疲れるところを歩けるな。あたしならちよつと肩が凝つて疲れるんだが……」

「まあ、ここの城主であられる北条氏康殿は何かと用心深い御方ですから、今みたいにこういう忍が厳重ですからね。ちよつと下手な事をするだけでも命懸けなんです」

「……………まあ、あたしからみれば痒い感じで苦手なだけだな。というより、あんたつて面倒事に絡まれるんだな。最早、そいつは体質みたいじゃないかと思うよ」

「アハハ、最早当たり前だと感じるくらいになってますけどね。今まで、こういう時にろくな事が無かつたせいかな……何故か疲れるくらいで済むんですよね」

初めてこんな殺気籠ったところで何気無い会話をしている自分に驚

きを隠せないが

隣りにいる一刀斎殿が忍の数など関係無いと言わんばかり気にしない感じもあり

いつもならば、こういうところで疲れが見えるのだが、この者といっただけで何処からともなく安心出来る感じがあった。

「文は、読ませてもらったわ。ここまで、よく来れたものね」

「まあ、今の松平家は西で桶狭間以来、尾張・美濃・南近江・伊勢と領土を着々と広げる織田と組んでおられ……武田と戦う姿勢もみせております」

「その織田と手を組んだ程度で武田に勝てると向こうは思ってるだろうから、私とも手を組むという貴方の案も本心じゃ聞き流された感じね。狸だって関係無く飼われてるものなんて、飼い主に似るって初めて会った頃から忠告してたわよね？まだ吉良の名を捨てたのは分かるけど本多左近重忠なんてより冴えないわ。その名前は捨てなさい」

「…………と申されましてもこちらは、密かに気に入っておられますので…………アハハ」

「アハハじゃないでしょ。貴方みたいな人だと大胆過ぎる織田や武田とは相性そのものが悪いの！！それは、貴方も織田イセタロウウジノフに近付いて痛感したでしょ？後、貴方のその名前も今から伊勢太郎氏信と改名させるよう条件の一つに加えさせて頂くわ。因みに、氏信の氏は我が北条家の一字で信は武田の一字というくらいは分かるでしょ」

「……………なるほど。伊勢は元々この北条家を築いた北条早雲公の元の名……………また、武田の家柄が源氏ですからな。太郎は源氏の長男の通じ名で使われておりますな」

氏康殿は、”まあ、あんたの名を武田より上だと見せかけたいのよ”と言わんばかりに目で語ってる事から私に断る権限もなく

ただ、頭を下げて承諾する意を見せ隣りにいる一刀斎殿は、何かと大丈夫か心配する素振りを見せているものの

仮にも相模の大将である氏康殿の前で臆する態度も見せず愛用する刀の手入れをしている。

その態度には、流石の氏康殿も初対面にも関わらず何かと気にしない対応でもしているかの如く

何も気にしない様子で私の改名を条件に加えて文の条件として記し

ている。

「…………ただ、あんな三河の狸相手に家臣の改名させただけでは割に合わないわ。今回は、大目に見て貴方をこちらの配下として置くとも記させておきましょう。貴方みたいな人間なら今の北条に置いといても問題無いのは確実だと思うし、人材は多いに超した事無いわ。因みに、佐竹が常陸統一を狙って土浦城を狙ってるの。この動きに他はどう見るかしら？」

「安房・上総を治める里見家の動きが気になりますが……向こうも安房の水軍を動かせば相模水軍とぶつかりましょうし、わざわざ兵を率いれば迂闊に相手をせず玉縄城辺りにでも籠城を仕掛けて様子見といきますかな。何分、里見・佐竹・太田・宇都宮と上杉謙信についた勢力はこの小田原城攻めで疲弊したばかりともお聞きしておりました」

「そこまで読めてたら良いとこよ。やはり、貴方のやり方は私と合うかもしれないわね。後もう一つ聞くわ。貴方がここに来る事を知った幻庵の叔父上が京より関白近衛前久と古河足利家と会わせるらしいわよ。さて、貴方ならどう読む？」

「さて、京の足利家亡き後ですからな。関東の足利家を將軍家に推挙させ、北条家がこの関東を独立の地にする好機と読みます。それに、足利家と関白殿下を縦に置けば北の上杉謙信もこちらに南下する事も難しいでしょう。というより、やはり私は三河へ帰れませぬか……………」

「…………結構興味深い話だわ。後、貴方をここから出すなんて私がさせる訳無いでしょ。何分、桶狭間以降から貴方の動向が気になってた頃だったから風魔衆を何人か織田のそこへ潜らせておいてたわ。それに、貴方の場合こちらで働く方が割に合うんじゃないかしら？まあ、この同盟を無かった事にして松平家が内部分裂を起こしてもこちらには関係無い事だし、貴方みたいな保守派は今後の織田の行く末には抵抗感すら覚えるんじゃないか？」

この時、自分が北条に何故か目をつけられてた事に寒気が走ったのだが

流石にそれを述べる事も出来なかった私は氏康殿の言い分に脅しが無いと考える

この時から既に頭が上がりないと察し新たなる主君に忠義を誓う形となった。

その後、私と一刀斎殿は氏康様が御用意なされた部屋へと案内され私は即座にその部屋で横になって身を休める。

「あんたも、主君がコロコロ変わって大変だな」

「まあ、仕方無いものです。それに、氏康様はあれで侮れない御方ですよ。何せ、武田と上杉が目を光らせて警戒している勢力でありますからな。その証拠に氏康様は私に上杉の関東出兵で弱まった勢力を次々と攻略するよう命じるでしょう」

「……下手な戦もせず弱ったところを確実に仕留めるか。近隣の大名からみりゃ油断出来ねえ奴だな」

「そうでもせねば領土は守れませぬよ。ただ、この関東の地を統治出来ただけでも武田の警戒はより強固となるでしょう。さすれば、次に目を向けるとすれば京を目指そうとする武田の背後をどう襲うか考える筈です」

その後、一刀斎殿は何か考え込むようこちらに目を置くと何故か、仰向けになっている私の頭をポンと軽く叩きながら

人の真ん前に座っているのに疑問を感じつつも本人は、何か子を見つめる親の如く優しく微笑むだけであった。

「まあ、あんたと会ってから大して日が経って無いけど私が見た限り今日のあんたは何か楽しそうに見えたよ。向こうに何の義理があるか分からんけどあたしは、ここがあんたの居場所だと思うよ」

「ハハ、随分と面白い事を言いますな……さて、近い内に何か主

命が下されるのは確かでしょう。とはいえ、休める内に休まねば損をしますぞ」

「ああ、言われなくともそうする。本当、あんたも無茶するんじゃない。多分、あんたは人が見えないところで無茶しそうだからあたしが最後までみてやるよ。その分強い奴がいたらそいつは、あたしの得物だっという事は忘れないでくれな」

そして、私は何か頭を撫でられた気もするがその時、意識がはつきりしない為

翌朝、何故か屋敷の外から凄まじい気合いの入った一刀斎殿の聲に臆して目が覚めるとは、私の心の臓に響いていた。

次回予告

「伊勢太郎氏信………何度考えても気が良い名前だと思うわ」

「…………その内、武田信玄公と出会うのが恐いですけどね」

「あら？他の家に属す家臣の事なんて流石の信玄でも黙り込むわよ。そんな信玄の顔を人早く見てみたいわ」

「まあ、武田信玄を相手に手も出したくないですからね……………」

「因みに、次回はその武田が小田原へ攻め込む話よ。全く虎相手にめんどくさいわ」

「そんな訳で次回”虎の牙と籠城戦” とうとう期待でございますな」

「ようやく、北条の実力が示せるわね」

第七話左近、北条に降る（後書き）

「それにしても、左近が見事に北条へついたわね……」

「ああ、あいつが北条に着いたのが意外だったがその分俺と信奈のコーナーも用意してみたらしいぜ。因みに、今回は左近のライバル的な存在か何か作者は考えてるらしいが……」

「候補としては、武田四天王の山県昌景に原作に無い伽羅だけど左近と古い馴染みであんた達と同様の未来から来た武田の家臣として扱われあんたみたいに本人と入れ替わったわけじゃない設定らしいけど……何か秋山家というところに継がれ秋山信友とかえ武田の家臣として仕えてる設定らしいわよ？」

「おいしい！！秋山信友って武田の家臣の中でも猛将に類される野郎で俺が知ってる範囲じゃ東美濃まで攻め込める奴だぜ！多分、あいつ戦上手でもあるから！！」

「でも、あんたの芸無知識も宛にならない時があるから分らないわよ？因みに、伊勢太郎氏信なんてダサイ名前を与えられた左近は、ここだけの話、江戸を治める立場にのぼらせるとも考えてるらしい

わよ」

「まあ、当時の江戸って竹千代が手を入れる前まで大した事が無かったらしいぜ」

「だから、あんたと同じ未来なんてどこから来た左近も目をつけたんじゃない。だけど、あんな平野に手をつけるより小田原で十分な気もするわね。って、こんな雑談しても意味無いじゃない!!」

「……………そうだった。まあ、この俺相良良晴と張り合える武將を伊勢太郎氏信なんていう奴以外にももう一人欲しいぜ」

「何か、話が違う気がするけど……………まあ、良いんじゃない?」

第八話虎の牙と籠城戦（前書き）

「本当、原作無視ね」

「アハハ、何を今更……」

「まあ、私の出番が増えるから構わないんだけど………そんなにネタも無いでしょ？」

「………そうですね。ただ日ノ本とまでネタが続かないんでそういう点では助かっていたりします」

「まあ、あくまでも関東を我が物にするのが私の野望なのだから別に構わないわよ」

「そう言って貰えて助かります」

第八話虎の牙と籠城戦

私がここ小田原で休み二、三日経った頃

川中島にて武田家軍師である山本勘助が行方不明であった時

今川義元が治めていた駿河の領土を持つ際に反対していた氏康様の意見を蔑ろに戦を仕掛けた武田信玄が小田原城まで向かつてるとの報せを聞いた氏康様が迷わず籠城戦の用意と風魔衆を用意したものの

突如、伊豆の少数部隊を率いる事を策に入れた私は風魔衆の情報を頼りに氏康様と画策した数千規模で小田原まで来る間に伏せてあった囷部隊に集中させていたのを見計らいつつも

小田原城を完全包囲した信玄に対し伊豆の五百余りの部隊と反武田派で内通していた駿河の二千余り集まった今川残党の兵を率いたが

目の前には明らかに待ち受けていた百三十くらいで低身長で真紅な鎧で身に纏う一人の少女が三千余りの騎馬隊を率いて待ち受けていた。

「あちゃゝ待ち受けてたというのは、計算済みだったが、まさか赤備えだったとはね……………で、あの小さい娘誰だったけ？」

「大将、あいつは武田四天王の一人、赤備えで畏れられる山県昌景って奴ですぜ。あんな部隊と真っ向ぶつかったら間違いなく俺達おじゃんじゃないっすか……………」

「まあ、真面目に相手したらそうだろうね。だが、適当に相手をするつもりは無いって言ったろ。今回はあくまである程度引き寄せたら敗走しても咎めるつもりは無い。それに、あのちっこいのが山県昌景な訳無いだろう。ほら、プルプル震えてるじゃないか。武田四天王の一人があんなに怯える訳無いだろ？」

「くっ、大目に見て逃がそうかと思ってたけど……………予定変更よ！我が山県隊はあんな残存部隊に加減無し！特にあの冴えない大将は私が自ら抹殺させてみせるから勝手に手出ししたら殺すわ！！」

私は、武田四天王の山県昌景という少女に安っぽい挑発を仕掛けただけだったのだが

どうやら、かなり誇り強いのだろう真っ向から馬を走らせながらも腰に備える太刀を抜きこちらを斬りつけんと言わんばかりの殺気を込めて向かってくるのに

私も太刀を抜いて馬を走らせながら向かってくる一振りを防ぐ。

「くつ、思ってた以上に化け物だ……私が敵大将を引き寄せる！！
適当に相手をしつつ退けえええ！！」

「一振りを防ぎながらも周囲の指揮をとるなんて余裕ね……」

「ふふ、全く無敵を誇る部隊こそ穴が見えんようだ。どうやら、そ
うちには鬼才なる山本勘助が川中島で討たれたという情報は大方、
本当だったようだ」

「…………何を言ってるのかしら？ 貴方、自分の部隊が敗走状態で何
を考えてるなんて北条の部隊は案外弱いわね。くたばりなさい！ は
あああ！！」

山県昌景が再び太刀を構え直して振り落とし

再び防ごうとするが僅かに刃こぼれが目立ち刀が折れたところに相
手の刃先が頭上に現れると咄嗟に私は折れた刀を捨てて素手で彼女
の刃を掴む。

「……………この一撃を素手で防ぐなんてね」

「いや、もう十分だ」

私が彼女の刀を素手で抑えつつ間に彼女の側に伝令で来た敵兵らしき者が必死に現れると私は、不適にも笑みを浮かべる。

「も、申し上げます！！本隊から退却命令が下されております！！」

「何を言ってるの！？私は嫌よ！！こんなところで逃げたらこいつに笑われそうだわ！！」

「で、ですが御館様からの直々なる命です！！ここは、退きましよう！」

「ふっ、武士の意志は武を志す者としては大した誇りだが……命を散らすにしても、己の誇りより主君の命を守ってこそが臣下たるものの務めというもの！！それも分らずに四天王を名乗るとは笑止なり！！」

「今回は、見逃してあげる！！だけど、次にあつたらただじゃ済まないわ！！」

私は、目の前でどうにか命を拾ったまま武田軍が撤退していくのを見届けつつ氏康様が待つ小田原城へ向かう。

それにしても、今回の戦は一刀斎殿を氏康様の警備にあててた為

本気で、山県昌景という化け物に殺されるところだったと内心ヒヤヒヤしたが

どうか、武田軍の包囲を崩しつつ幾つか部隊を分けながらも本隊を小田原城のみに配置させるのに集中させる為

玉縄城や八王子城に勢力を分けながらも数千もの迎撃に向かわせた部隊も壊滅させないよう敗走させながらも小田原へ誘き寄せるよう誘い込みつつ包囲しきった状態でどう敵の一角を崩すか勝負だったが

まさか、簡単に釣られる相手もいたとは思ってもよらなかった。

その後、武田信玄自ら四天王を率いて小田原へ赴き駿河の件は、今後相模に手を出さなければ問題ないという形で手打ちとなる。

「その貴方、先の戦で名を聞き忘れてたわ」

「それは、私が貴女からみれば大した事でないという事じゃないんですか？まあ、こつちとしてはそれで好都合なんですが……」

「そうでもなかったわ。さあ、名を教えなさい。でなければ、私の誇りに傷が付くの！」

「……伊勢太郎氏信と申します。これで、よろしいですか？」

「ええ、構わないわ。因みに、私の事は源四郎とお呼びなさい」

「山県がその名を男に教えるなんて珍しいもんだね」

廊下で何故か源四郎殿に呼び出しをくらっていたところ突然、戦場で聞き忘れたから名を教えろと言うのだから内心、笑いが吹き出しそうになるが

ここは、抑えさせて頂こう。

だが、突如源四郎殿の背後に信玄殿が現れた際

何故か、顔を赤くしていた源四郎殿の姿に思わず吹き出しそうになったが

あまり、馴れ馴れしく関わると部屋の向こうから氏康様の鋭い視線がこちらに向けられており

何故か、蛇に睨まれた蛙のような形となつているところを信玄殿が腹を抱えて笑うのだが

信玄殿、そこで笑うと氏康様の美しい顔から青筋が浮かびますよ。

「アツハハハ！そんなのあたしには関係無いだろ！まあ、吉良義康だか伊勢太郎氏信だとかどっちでも良いけど太郎は、何かと気にかけすぎな上に氏康と似すぎなんだよ。男なら思いっきり大胆にいかないと山県に引つ張られるぞ！」

「ちよつと信玄！！貴女、人の家臣に馴れ馴れしく太郎なんて呼ばないでくれない！！太郎氏信の名を容易く呼べるのは私とそいつが雇つてる剣客くらいなの！！」

「本当、小さい奴だな。そんなの気にする事無いじゃないか。何せ、あたしの大切な家臣ですらこいつにお気に入りの名前を教えるんだ。それくらい、大目に見ないと胸板のまんまだぞ」

「それは、関係無いでしょ！！いい！？胸なんて飾りなの！！とい

「うより禁句だつた筈よ――！」

「まったく煩い奴だ。そういえば、太郎だが、あたしが京へ向かうのも心許ないからちよつとばかり山県と馬場の補佐役程度に借りてくぞ。それに、言い忘れてたが三河の松平は北条との同盟を一方的に破棄したそうだ。全く織田に唆されたかわからんがあの家に見込みは無いと思いな」

「構わないわよ。それに、服部半蔵なる伊賀の者が使者として貴方を返せなんてこっちの同盟を無かつた事にしたのだし、とはいえ、私は貴方を三河に返す気も無いし三河の松平元康にはちよつとばかり灸を添えてみようかと思つてたところなの。だから、そっちの馬も幾つか買わせて貰うわよ」

私は、この時元康様が同盟を結んでなかつたのに驚きを隠せないまま北条に齒向かう事でもすれば三河は滅びると考え信玄殿の援軍として北条の家紋の旗を掲げて出陣を決意する。

次回予告

「原作では、一気に四巻か五巻くらいまで吹っ飛びそうな気が致しますが……」

「しょうがないじゃない。でも、次は宇都宮・里見・佐竹と史実ではあり得ないくらい領土拡大する話になるらしいわよ」

「また、その上に反今川幕府として古河足利家を利用し足利幕府を再興させる話になるらしいですぞ」

「因みに、古河足利家は河越の戦いでちょっと懲らしめたか後からこちらのいいなりで助かるわ」

「まあ、その為に足利幕府を再興させて北の上杉家と対立しないという氏康様のやり方こそ祈願なる関東独立の大きな一歩となるでしょうからな」

「その為にも里見・宇都宮・佐竹と上杉に手を貸し愚かにも勢力が弱まったところぞ好機……」

「全く弱まったところに容赦無いから胸板なんだろうな。あたしからみりゃ弱まったところを次々と叩きのめす性悪女にしか見えないんだが……」

「フフ、乱世でしゃばるにも潰される覚悟が必要……氏康様は、それを関東で知らしめたいのですよ」

「全く氏信の言う通りよ。信玄？貴女も諏訪や小笠原・村上と全勢力をともに全部を相手をした訳じゃないじゃない？後、その胸板は禁句よ！！」

「……………やっぱ、太郎だけでも連れてく必要があるな」

「安心なさい。この山県昌景が直々に太郎を戦場で鍛えさせておくわ。次回、”下野攻略戦” 私達の出番はただだけどよろしく頼むわ」

「あつ……………何気に次回予告取られた」

第九話下野攻略戦（前書き）

最近、暑い日が続きますね…（^| ^ ;）

体調管理には気を付けましょう

第九話下野攻略戦

武田が織田と戦を仕掛ける為に軍備を備えてる最中

なんと、織田が堺を治め大和の松永久秀を配下にしたとの話がこの小田原まで広がっていたのだが

今の北条家で決められた案は、江戸の町を拡張し南蛮の種子島を大量生産する為

製造所を設けるべきでないかという意見をどうにか通すよう相模の商人と話し合いながらも種子島を導入し

まずは、相模の武器職人達に堺や紀伊へと向かわせ鉄砲の製造を学ばせていたりする。

ただ、費用がかかるせいか最近では、江戸の町拡張計画で頭を悩ます私に届くのは、支配下に治まっている結城氏や小田氏と共に下野の宇都宮や、常陸の佐竹を配下へ治めよという勅命が下されており

何故か武田側からも源四郎殿が赤備えの兵を数名率いて現れていた。

「全く貴方は、奉行なのか武士なのか分からないわね。その刀は飾りじゃないかと思うわ」

「他所にこちらの口出しをされても困りますな。こちらら、金をかけては鉄砲だの町の拡張だのと領内を固めて周囲を牽制するだけでも精一杯なんですよ。それに、戦だってタダじゃないんですし軍備するだけでも食糧だの時期だのと考える事だらけなんです」

「だから、奉行みたいな奴等ばかりなのね。それに、あの様な飛び道具に頼るなんて私と一騎討ちをした者の言葉とは思えないわ。誇りある武士ならば槍か刀で勝負をつけなさい。仮とは言ってもその”太郎”の名も泣くわよ」

「ふっ、尾張の織田と戦うのに苦戦致しますぞ。向こうは、守りを固めるにしても貴女が言う飛び道具を必ず備えるでしょう。あまり、侮るといつかその飛び道具で命を狙われるんじゃないんですか？とはいえ、飛び道具なんて急な野戦を仕掛ける際には重いだけで邪魔となるので貴女の騎馬隊も羨ましかったですけどね……………」

「おい、太郎。それ言っちゃうとまた山県マカベウジモトの鼻が伸びるとか言っ
てなかったか？後、常陸の佐竹義重という小娘に仕える塚原ト伝の弟
子でもある真壁氏幹とかいう小娘相手に手合わせなんてね。もっと
腕がある剣豪と闘いもんだ」

ただ今の私は、他所から来た高貴な小娘と旅の道連れとして拾った一文無しに近いにも関わらず拾ってしまった女剣客の二人から色々と言われながらも

慣れない算盤を片手に江戸の町を如何に拡張させるか江戸衆の方々と話し合った記録書と睨みつつ

仕事に追われる日々を続けていたところに伝令からは、戦仕度を終えたとの報せが入ってくるわとなかなか暇がない一日を過ごしていた。

また、江戸衆でも活躍していた遠山綱景殿と富永直勝殿の御二人が最近、国府台での戦で亡くなったのもあり

職務に追われる最中、猫の手を借りても足りない中で織田信奈について話し過ぎた己を憎みたいがそんな時間も無い中

何故か、源四郎殿が甲冑を外しては優雅に紅茶を人が急いでる前で味わっていたり

仕事にキリがついた頃には、一刀斎殿が愛用の刀を腰に差しながら常陸の旅へと向かっていたらしくその証拠にちゃっかり用意した炉

銀が机の前から消えていた。

「さてと、そろそろ休まねば私の体力が危うい……………」

「やはり、慎重派で疑り深い氏康のどこまで苦勞した甲斐があったわ。あんな家柄ばかり気にする家臣ばかりでまともに職務をしたたのは、貴方くらいだったもの。こんなんじゃ氏康が私達や上杉相手に警戒するのも無理無いわ」

「とはいえ、織田みたいな他国の者問わず有能なる将を募らすだけでも周りの国人衆やら古い家柄の臣下が謀反から離れていくのも事実……………何故、源四郎殿がおられる武田が最強と申せば私の推測に過ぎませぬが、信玄公の臣下を育成が上手だからでしょう。要は、我等北条にしる北の上杉にしる如何に家臣達を扱い育てるかがこれからの乱世で領土を固めたり戦を勝利に導かせたりなど繋がるのだと私は、思つのですよ」

「……………なかなか面白い考えをするのね。まあ、確かに私みたいな他家の後取り候補から外れた者や、農民出身の高坂とか目につけなさそうな奴ばかり見つけたり、小山田・甘利・板垣・原など古くから仕える重臣の扱い上手いわ。それに、今回ばかりは面白いお土産話が出来そうね」

源四郎殿が、急に紅茶を味わいながら笑みを浮かべていたのに些か疑問を感じたところで

河越城内で私が出陣最中に病で倒れて河越城まで退却したとの虚報を宇都宮勢に流したところまんまと引つ掛かったとの報せを聞きつけた私は、即座に甲冑と新たに購入した太刀を片手に江戸城から出陣し

宇都宮勢は、突如来た江戸の兵に混乱状態なまま河越城を守っていた部隊との挟撃に遭い敗走していく。

そのまま勢いづいたところで、私は源四郎殿が率いている赤備えの部隊と共に下野の宇都宮城を包囲し

降伏勧告を申し付けたところ宇都宮家当主である広綱から一人娘でまだ生まれたてで生後一歳も満たない伊勢寿丸を人質として差し向けるのを条件としたところ

広綱は、その条件を使者を通して承諾する。

因みに、この事は氏康様からも既に許しを貰っていた範囲内でもあった為

特に、大きな被害が無いまま下野は無事に平定し

常陸で佐竹家を継いだ十三、四歳くらいという若さ当主となつたばかりの佐竹義重が苛立ちを覚え下野まで出陣用意まで整えようとしていたらしいが

周囲の家臣共に止められ断念したらしい。

「本当、貴方のやり方って酷ね。まさか、身も弱りきつた当主の跡継ぎを小田原の人質にするなんて用心深い北条らしいわ」

「それが、乱世です。また、無条件条約なんて甘い事すれば向こうはまた再起を伺つて戦を仕掛ける筈です。しかも、この下野が統一された事により常陸の佐竹は孤立も同然……今頃、里見家も相模水軍の兵力と玉縄衆や小田原本隊が居城を囲み同じような手を打つてる事でしょう。ただ、里見家当主里見義堯がくせ者故か……如何に手を打つか悩みところではあるでしょう」

「……………申し上げます。里見義堯殿が氏康様の前で頭を下げた模様どうやら、相模水軍が武田の救援として出た駿河水軍と無事に合流出来た上に安房まで波に異常が無く辿り着けたのが要因かと……………」

「大方、無駄に兵を削らぬ為でしょう。里見義堯殿は食えない御方です。兵を整え次第、小田・結城家と連携し佐竹との一戦に交えましょう」

「慎重派だとばかり思ってたけど意外と大胆なところもあるのね。とは言ってもただの袋叩きにしか見えないわ。もう少しマシな策の方が良いわ」

源四郎殿が何か不服そうな顔で私の顔を見ると周囲にいる北条家に属する豪族達が苦笑を浮かべるが特に反対する方々がないのに対し

彼女は、”臆病者の集まりね”と言わんばかり溜め息を漏らしたせいか

何故か、源四郎殿の顔色を伺う方々が増え先程まで盛り上がっていた方々が急に黙り込んだ。

次回予告

「ゆうやく、私の関東制覇も近付いてきたわ」

「ただ、最近では奥州の動きが怪しいとか……………」

「仕方ないわ。あんな警戒しあってる連中が内輪揉めしたところで私達には関係ないわ」

「とはいえ、奥州の地は、馬も豊富ですし、過去に奥州藤原氏が平家の頃まで守り抜いた程の場所でもあり守備も固めやすいかと……正直、上杉と渡り歩くには欲しい領土ではあります」

「近い内にもこちらに攻め込むだろうから待ってみなさい。それに、まだ佐竹討伐を終わらせれば殆ど面倒な勢力がなくなるわ」

「ただ、武田と上杉が目障りですが……」

「だからこそその古河足利家でしょ。まあ、後は里見と佐竹が大人しくなれば関東で北条に齒向かえる勢力は無に等しいわ。次回、”常陸に出る鬼姫”を刮目なさい」

「あつ……………私の台詞、最近とられやすいな」

第九話下野攻略戦（後書き）

「何か、北条の勢力が少しずつ強くなってきたな……」

「因みに、この時は私達が金ヶ崎の戦い真っ最中だったという設定らしいわよ」

「という事は何か？信玄が俺達と戦う時には北条も関東統一とかで兵を固めなきゃならねえし後に梵天丸が関東制覇を目指すからそれどころじゃなくなるじゃねえか？」

「そんな事をどうにかするのが北条氏康の恐いところよ。ほら、よく読めば解るけど武田から馬を買ってたじゃない。それに、左近の案も受け入れ鉄砲の製造まで始めてんのよ。あんな資源豊富なところがそんな事すればたちまち伊達も関東の城を落とすのにかなり手間がかかるじゃない」

「そりゃ、そうだな……となるとそろそろ俺と左近の戦いの火蓋もそろそろ見所という訳だな」

「まあ、そこはどうなるかわからないけど考えられるわ。それにし

ても、等々猿の好敵手も新たに増えなかったわね」

「う、うるせい……作者は和牛の秋山こと秋山信友以外にも小幡昌盛という”身の程を知れ”とかいう台詞を残した虎盛の息子で中身だけ入れ替わったとかいう設定すら考えてたらしいぜ。他は、朝倉の家臣山崎長徳という槍の使い手で後に十兵衛ちゃん（朝倉家滅亡後）・勝家（山崎の戦いで十兵衛ちゃんが討たれた後）・犬千代（賤ヶ岳の戦いで勝家が自害した後）って主君が入れ替わってる奴や、斎藤利三とかいう十兵衛と同じ蝮の配下だったんだが斎藤家滅亡後に一鉄のおっさんに拾われるんだが後に十兵衛ちゃんの臣下として最期まで戦う武将も候補にあげてたらしいぜ」

「……………何か大抵の奴等がなかなか冴えないじゃない」

「言われてみりやそうだな……………」

第十話常陸に出る鬼姫（前書き）

気付いたらもう十話………

第十話常陸に出る鬼姫

「……………我こそは常陸太田城城主、佐竹義重！小田氏治よ！この一戦にて常陸の命運をかけた一戦交えようぞ！！」

「ひいひい！！あの御方が常陸の鬼姫こと佐竹義重だべ！！本当、伊勢様も鬼退治なんかよくやるだべ」

「誰が好き好んで鬼退治なんてするか。武田四天王で最も身長が低いにも関わらず武士魂モノノヲみたいな誇りが強い奴なんかいなきやもつと楽だっただが……………」

「申し上げます！！小田氏治殿の隊が佐竹軍の本隊と交戦しておりますが、劣勢な模様！！計画通り退却なさりたいところですが、ほぼ部隊が壊滅的であります！！」

伝令の報告を聞く私は、佐竹家と常陸の領内で揉めていた小田氏治という武将が他の隊より前方に出て佐竹家を討てる絶好の機会だと考えていたらしく

救援要請が来てるにも関わらず殆どの部隊が様子見みたいな形だっ

た為か

私の手勢だけが、今回の総大将を務める大道寺政繁殿という北条家の中でも名家中の名家で宿老まで務める御方の指示で、氏康様の命でかけつけた里見義堯殿に、旧上杉家家臣にて関東遠征でも謙信の協力をしたものの謙信が関東管領の職に就く際、乗馬をしたまま見届けたところ謙信にぶちギレられ不信を抱いてこちらへ寝返った経緯がある老将成田長泰殿の見張りを兼ね小田勢に加勢するという形となる。

因みに、北条家に限らず大抵の家臣団は実力より家名で出世する家柄も珍しくないせいか

大将なのに、佐竹勢と戦いがつてるところを他の方々が必至に抑えて適当な案ばかり指示している事は、気付いているが知らない顔を通して通している。

「申し上げます！！里見義堯殿、一度戦をする前に確認したき事があるとの事で御目通り願っておりますが如何致しましょうか！？」

「あつ、通して構わんよ。何かありそうな場合は途中で拾った一刀斎殿かそこで南蛮の茶を堪能してる人に斬り捨てて貰うから」

「まあ、あたしは構わないけど。後、佐竹家の真壁氏幹の腕は確かに塚原卜伝から教わった一の太刀らしき技があったから間違いないと見て良いだろう」

「強ち潜らせた者の情報も嘘ではなかったか……………」

「何気に疑り深いのね。因みに、私は貴方が斬られそうになっても気にしないわ」

源四郎殿が、何事も無いよう紅茶を味わいながらも他人の陣で寛いでおり

一刀斎殿も刀の刃を手入れして落ち着いたりと完全に自分の事に夢中となっているところ肩まで伸びていた本猫寺けんによ殿と似た淡く桃色に近い赤髪に白い肌・権六殿と同じくらの大きな胸や体つきをした二十過ぎの女性が現れる。

「貴公が、里見義堯殿ですか……………」

「如何にも私が里見義堯よ。全く、北条氏康という人間は本当疑り深いわ。長く戦ってたけど敵わない訳がよく分かる気がするわね。それに、監視役も冴えない雰囲気だけど嫌いじゃないわ。特に、その使える手段なら何でも使うような雰囲気でも見せる人は好きよ」

「伊勢太郎氏時だ。全く、誉められてるのかどうなのか解りかねませんが……ここで軍を率いる伊勢太郎氏時と申します。後、打てる手は如何なる策でも打たねば人の世なんざ生きていけませんでしょう」

「全く北条氏康の臣下としては、珍しいですわ……まさか、駿河水軍まで動かすとは思ひもよらなかったですわ。私の中では安房で相模水軍・上総にて千葉・北条綱成が動くかと読んでましたの。よにもよって安房には相模・駿河水軍、上総に千葉・北条氏康・綱成が率いる数万規模の大軍勢とぶつかるなんて相手しきれる筈が無いじゃないの。また、あの慎重深い氏康が動いたかと思ったら西の織田・徳川と相對しようとする軍備を始めていた筈の武田が四天王まで使って援軍をなさるなんて、後ろを気にする必要なんてありませんものね」

「江戸・小田原の鉄砲製作の場を設けたり、私達武田の援軍、下野を治める宇都宮の降伏さに常陸統一戦に乗るなんて全く骨が折れるわ」

源四郎殿が溜め息を漏らしやれやれと言わんばかりな感じを見受ける私は、そこは自分が溜め息を吐くところでないかと内心でツツコミを入れようかと思っただが

彼女に頭が上がらない自分がいた為、私は太刀を抜いてそろそろ小田軍を壊滅寸前まで追い込んでいた佐竹勢に横槍を仕掛けるよう指

示をする。

そして、私達が佐竹勢の本隊まで駆け付けた頃

そこには、二人の少女が背中を守り会うよう太刀を構えて小田の兵達を斬り込んでおり

一人は、赤い陣羽織を纏い信玄殿と似た肩まで伸びていた深紅の髪と鋭い睨むような目付きが目立つ小柄な幼き当主佐竹義重であるらしく

もう一人は、甲冑こそ身に付けて無いものの二メートル以上ある太刀が目立つ斬馬刀みたいな刀を振るう前田犬千代と似た小柄な小柄な黒髪の少女が多数の兵を纏めて斬り落としてあた。

「……………義重様。どうやら小田の部隊は困ったらしいですな」

「……………あの部隊が私達を相手にしてる間にも太田城を攻め込む腹でしょう。……………今の北条は武田を後ろ楯に下野の宇都宮、安房・上総の里見まで抑え込んでるもの。向こうが戦力を上げて攻め込めば兵の士気も高まるという事ね。嫌な黒幕……………貴方ならそう思わない？」

「……………全く、小田勢だけでも壊滅へ追い込むとは侮れませんな。いや、鬼佐竹に鬼真壁と大方、その異名も本当だったらいいですな」

「その様子だと私達に惚れたかしら？まあ、考えてあげても構わないわよ。但し、この私から一本取れたらの話だけだね。氏幹、手出しは禁物よ。はあああああ！」

「ちつ、やはりこうなりますか……」

義重が、太刀を正眼に構えるもすぐに私の間合いを詰め相手の喉仏に当たる剣先を腹部の辺りまで下ろして突き刺す形で攻め込んで来たが

私は、彼女の一撃を避けるよう間合いな詰められたと同時に身を彼女の向かって右側へずらして上段の構えをとって即座に剣を彼女の頭上で寸止める。

「へえ、いい腕じゃないの。私の一撃をかわすなんて面白いわ」

「まあ、一か八かと内心避けられるか分かりませんでしたけど………で、如何なさりますか？援軍無き太田城は、間もなく落ちますぞ」

「そうねえ………里見・宇都宮までそちらに降り、蘆名までもそっち

と同盟を結んで中立の立場になった今、大した勢力も無いとこと組んでも仕方ないといったところでしょう？とはいっても北条氏康の傘下に加わる気は無いけど貴方の下ならついてあげる」

「うーん。それはどういう事でしょうか……………」

「はあ…………義重様の手合わせをして今まで、勝てた殿方はおりませんでしたからね。なので、御自身に勝った者こそその者の配下及び嫁となると決意なされております。因みに、貴方の場合ですと佐竹家に婿へ入って貰う形となりかねませんが……………」

何故か、よくわからん展開にさっきまで戦ってた筈の義重の顔が赤くなっており何かモジモジとしているのが妙に気になって仕方が無かったりするが

その展開をたった一人の少女がぶち壊してくれた。

「貴女、何勝手な事を言ってるの！？こいつは、北条家の一家臣に過ぎない男よ！！そんな奴に清和源氏の血筋を持つ大名と結ばれるなんて聞いた事無いわ！！」

「大名家の家柄とて、敗者には関係無いと思うの。それに、私はこの者に従うつもりよ。でなきゃ、氏康の傘下に加わるなんてごめん被るわね。後、貴女何者？」

「私はこの者の援軍に来た甲斐武田家に仕える山県昌景よ」

「へえ、貴女が噂の赤備えね。ならば、他家は口出し無用じゃない。ちよつと黙ってくれると助かるのだけど構わないわね？」

「うつ、貴女には関係無いわ！！さあ、モッノ武士ならば武士らしくこれで勝負なさい！」

源四郎殿がいきなり太刀なんて抜こうとした瞬間、私は彼女の太刀を握る手を必至に食い止めるが

その後何事も無かったにも関わらず何故か、源四郎殿に睨まれながらも義重を大道寺殿にお預けして氏康様の下へ送られると江戸城内へ帰ったところ

私の部屋には一人の忍から文を頂き内容を確認すると武田の援軍を終え次第、伊豆のニラヤマジョウ葦山城をお与えするというの事らしく

ボーツと座っている高身長で見覚えがある女性が何故か私の部屋で和んでいた。

「ん…………伊…………あつ…………勢殿」

「はあゝ馬場殿で御座るか。その様子ですといよいよ西へ向かわれますか……」

「ん……………いよいよ……………動く……………と……………の……………事」

「早い話、私の赤備えとこいつの為に用意した氏康の騎兵を合わせ駿河へ向かわれるというところでしょ」

「あつ……………ん……………そう……………なる。その……………後……………こちら
も合……………流……………する」

「……………でしような。となれば馬場殿の部隊と源四郎殿の本隊に私が氏康様より頂戴なさる兵が三千となりましょ。此度は、それ程までに大きな戦となるでしような」

その後、小田原へ向かい氏康様より騎兵三千と伊豆の韮山城を与えられた私は、源四郎殿・馬場殿と共に駿河へと出陣する。

次回予告

「いよいよ、この北条も西に名があがるわね」

「とはいえ、遠江・三河と援軍に向かうくらいですがな」

「それでも北条の旗が上がるのだから面白そうじゃない。それに、私はその間にでも足利義氏を鎌倉に置き風魔を使って京から関白近衛前久も御越しさせるわ」

「まあ、関白を御利用なさって足利幕府の再興をなさろうとしておられますからな」

「誰も今川幕府なんて支持出来ないでしょう。それに、姫巫女様まで誘拐したいけど……噂じゃ何かしら結界が強いと聞くし、下手に危険な手をつつてまで忍の数を減らすのも好ましくないわ」

「……………そうですね。忍の数も無限ではあられませんからな。さて、次回”三方原と元康”ん？次回は、私視点で語らないんですかああああー！！」

「あら、たまにはいいんじゃない？ちよつと興味深いわよ」

第十話常陸に出る鬼姫（後書き）

「知ってた？これもう十話進んだらしいわよ」

「早いな……それに次回から俺の出番だろ！？一益ちゃん連れてくのに苦労したが次は俺と左近がいよいよぶつかるぜ！！」

「まあ、そんな事言っつて自滅しなきゃいいわね。次回が楽しみよ？」

「おい！信奈！！それ何か俺が負けるフラグにしか聞こえないぞ！」

「え？今更、気付いた？そういう点で気付くのが遅いわね……………」

第十一話三方原と元康（前書き）

最近暑っっっっいー！

と叫んでみました。

第十一話三方原と元康

左近さんが北条に降つてから幾ばくかの月日が経ち武田信玄がいよいよ西へ挙兵する動きを見せる。

また、左近さんから何度か北条との同盟について文が届いていたけど結んだところで武田を討つより関東平定にしか力を入れてない勢力と組んでも意味が無いみたいだったので断りの返答を送ったところ

武田軍が二万八千の本隊を率いたのに対し北条氏康が三千の騎馬隊と相模・安房水軍を援軍に向かわせたという報せが私達のところへと届いた。

「まさか、左近が動くとは思ひもありませんでしたな……」

「……左近、戦だと手強い。今の姫様の本隊じゃ……危つい」

「……全くです。それに、伊賀の報せによれば北条は最近小田原・江戸に加え鹿島辺りまで鉄砲の製造が進んでいると聞いております。また、相模水軍にその鉄砲の試し撃ちまで行つてるとお聞き致して

おります故、織田信奈が持つ手持ちの水軍相手が援軍に来て怪しいかと思われれますな」

「忠次さんの意見も最もかもしれませんが、サル晴さんなら絶対に奇跡を見せますよ！！」

「ふつ、あのでしゃばりが左遷されて伊勢まで行ったとはいえ援軍を間に合わせたとしても左近殿の奇策に引っかければ洒落にもなりませんでしょうな。それに、御館様もお気付きかもしれませんぬが……あやつがおるのですたら、武田に二俣城を陥落させながらもこちらの出方を伺うでしょう。となれば、ここで当分様子を見ることに致した方が無難かもしれませんな」

康政さんや忠次さんはサル晴さんの奇跡があっても左近さんの實力に及ばないという意見をハッキリ言ったのに

私は、何故か悔しいと感じがあった。

なので、その後もサル晴さんの案を幾つか取り入れ武田騎馬隊なんて存在しないという仮定で包囲された二俣城で確かめたら思いっきり威勢がいい馬ばかりだったり

サル晴さんが信玄のとこへ夜な夜な忍び込んだ結果、見事に健康そのものだった

サル晴さんが信玄にデレデレで帰って来た時は、流石に忠次さん達の怒りは頂点を越える寸前で私も武田信玄や吉姉様みたいに天命を打ち破るつもりで浜松城を通り越し三方原へ向かう武田軍を追撃したところ

高台には、無数に武田軍の旗が掲げられ私は、その場でただ腰を抜かす事しか出来なかった。

「松平元康はいるか」

「…あ、あ、あなたが……」

「そうだ。あたしが、武田信玄だ」

私は、初めて武田信玄という人物を見た時、今川家に属していた頃からよく信玄や氏康の顔を伺いにいていた左近さんが昔、こう言っていた。

” 甲斐の武田は相変わらず侮れませぬ故、本音を申せばあまり甲斐へは赴きたくないものですよ ”

と愚痴つてたりしていたが、あんな威圧出来る相手によく使者として行けたものだと思つてたりもする。

そんな事を思つてる間にでも親衛隊の人達が信玄に目掛けて弓や鉄砲を放つけど皆の手が震えてるのもあり

馬上で腕を組んでいた信玄には全く掠りも当たらなかったのには、誰もが動揺して混乱してもおかしくないかもしれない。

「三河のためき娘。もうわかつただろう。お前ごときには、わが進軍を止める事などできぬ。あたしに降伏するか」

信玄は、私に降伏を進めるけど吉姉様を裏切る訳にもいかなかい私は、涙目で首を横に振るう事しか出来なかった。

「ならば、織田信奈と共に散る覚悟か。お前に仕えていた太郎の今までは、これで完全に無へと消えるな」

「……………わ、私は」

「松平元康。今のお前など織田信奈の下手な模倣者に過ぎない。勝てぬとわかつていてがむしやりに突撃するのは、単なる蛮勇だ。織田信奈が桶狭間で勝利したのは偶然でも奇跡でもない。あれは、情

報戦での勝利だった。あたしが三方原を突っ切って三河へ入るだろうというお前の予想は情報を掴んで導き出した結果ではない。お前自身の個人的な願望に過ぎない。織田信奈と対等の位置にまで上り詰めたという、お前自身の淡い夢が 判断力を鈍らせ、松平全軍の壊滅を招いた」

信玄の言った通りかもしれない。私は吉姉様の真似事をしたつもりが皆まで追い込ませてこんな事態になったんだ。

だから、左近さんも戦の常に下手な動きを見せずにいたんだ。

でなきゃ、北条と手を組んでまで武田の動きに注意するなんて意見が出なかったんじゃないかとうやくわかった気がする。

「松平元康よ。織田家となら対等な同盟関係を結んでいられると思っっているのか？無理だな。今のお前の立場は、今川義元に仕えていた時と全く同じだ。強者にすり寄り、阿諛追従で生きながらえてるにすぎん。お前の選択肢は、潔く今ここであたしに降伏するか、あるいは織田信奈の家臣になるか、だけだ。戦国の世に大名として独立して誇り高く生きるということ、巨大勢力に庇護されて安寧に生きるということは、決して両立できない。お前は、その両方を同時にやるうとしている。夢はあるのか？この戦国時代の日ノ本をこのように変えたいという、志はあるのか？借り物ではない、お前自身の志が？そこが、お前がたぬきと呼ばれるゆえんだ」

「う、うわあああ！」

私は、もう何もわからないまま無我夢中で武田信玄を目掛けて暴れるしか出来なかった。

でも、私が暴れて太刀を抜いた時、見覚えがある顔から全て冴えない雰囲気が目立つ人が私の前に騎乗したまま現れ

馬から降りると同時に私の頬を強く叩いた。

「……………全く、久方ぶりに浜松城へいけば落城させなきゃならん事になるわ。前の姫様であられる松平元康殿は、北条との同盟を跳ね返したから何かあるかと思いきやこの有り様ですからな。後、サル晴殿……………あの伊勢の海賊衆だが、駿河の水軍と互角だったのに対し君の見立ては見事だと思った。けど、安房と相模の海軍を前に出しただけでそつちは既に形勢不利になりつつある。君が次にどう打つかが楽しみだ」

「……………我が大将ながら相も変わらず冴えない上に性格が悪い御方だ。だからこそ、氏康殿と馬が合うのだろうな」

「ハハ、我が補佐役ながら有能なのは分かってたけど何でも容赦無いよね。というより、何か緊迫感が私の部隊だけ足りない気がするのだが……………」

「まあ、太郎だからな。部隊に関係ないあたしでもお前と一緒にと気が抜ける時が多かったりする」

「いや、一刀斎殿の場合は強者と出会えなきゃ修業以外、人の部屋で休んでますよね!？」

へ？

私の耳元にも浜松城から落ち延びた三河兵からの情報が届いており

啞然とする私を左近さんが私の知らない小柄な女武将と剣客らしき女性と一緒に呆れてるかのよう溜め息を漏らしているのには、私とサル晴さんも思わずきがぬけそうになったけど左近さんは鞘から抜いてあつた太刀を納めようとしなかった。

「さて、松平元康殿。今の貴女様には三河に逃げ織田の部隊と合流するか、はたまたここで朽ちるか、それとも武田の傘下にいるかの三択しか御座らん。因みに、我が新しき主北条氏康様は、貴女様が織田と組みし武田とぶつかることを身の程知らずと呆れられておりましたが……それは、私も同意だな。今の貴女様は何も守れてない」

「おい！お前は竹千代を裏切って何を言っただよ！？」

「…………裏切りね。まあ、私が口だす通りなんて本来無いけど、乱世で一国の主をやるなら部下の能力をどう活かすか出来ないが無意味に等しいものよ。とはいっても、真つ向に向かつても勝てない者がいれば徹底的に対抗しても領内を守りきれぬならまだしも、貴女の場合だと領土を守り抜くというより武田との戦い一筋に目を向けてるようにしか見えないわね。そんなんで、一国の主なんてお笑い草も甚だしいわ。さて、私は兵を纏めておくから話が終わったらさっさと戻ってよね」

「…………あらま。彼女に私の話したい点を全て語られちゃったかな。まあ、相良サル晴殿・松平元康殿…………もう少し己の身の程を知りなされ。まあ、相良サル晴殿よ。貴公の部隊は美濃に一旦戻らねば武田と戦えんだろう。となれば、貴公みたいなでしゃばりと相性悪い武田四天王とはぶつかるなよ。君が戦うには、まだ自滅しか見えん」

「お前なんかは何も言われる筋合いはねえ。それに、俺はどんな事だろうとお前なら負ける気がしねえんだよ！！」

「ふむ。君には、余計なお世話だったようだね。まあ、私も援軍として君達と戦うが…………織田に容赦しないとだけよろしく頼むよ。さて、うちの副将は、元々一国の主だったから色々と厳しいんだよね。では、また戦場でお会い致しましょう」

左近さんが、馬に跨がり私達のもとから去っていくとサル晴さんがムキになって怒ってたのに何故か呆れる。

多分、左近さんが言いたかったのは乱世で一軍の大將を務めるのにムキになってぶつかるとはかりじゃ何も守れないという事なのだろうと勝手に解釈をしたけど何故か間違いには、思えなかった。

でなければ、わざわざ私達が武田信玄と語ってたところに目を向けて話しかけるなんて事をする人ではないし

色々謎が昔から多かった人だけど私は彼が大事を言葉で語るのが下手な分、行動一つで伝えようとする不器用さがある事を知っている面もあり

以上の事から間違いじゃないのだと勝手に解釈をする中

三河の全部隊をかき集めて美濃へと向かう。

因みに、三河は信玄が全域制圧しなかった為か後に、領土無しのままを覚悟していた私に帰る場所が残っていたと知る事となるのは、後の事だった。

次回予告

「……………太郎め。氏康がいなかったら今回ばかりはあたしに回したな」

「う……………あつ……………ん。伊……………勢は……………あ……………る……………じに……………ちゅう……………ぎ」

「あいつは、そういう奴だ。で、最も苦手な奴に面倒事を押し付ける点まで氏康と似てるんだよねあゝ後、馬場。何度も言うが話すらさっさと話せ!!」

「ちな……………みに……………うじ……………のぶ……………逃げ……………た」

「……………遅い!! ったく、馬場がこんなところに出たかったのが意外だったが相方をあたしに回したツケは高いっていうのを次の予告で教えなきゃいけないかもな。次回は、”美濃防衛戦”だ! さて、太郎氏信を呼んでこい!! たまには、根性叩き直してやる!!」

第十一話三方原と元康（後書き）

「なんか、私の出番無さすぎない！？wikiですらまだ登場人物で出てない北条氏康が出過ぎなのよ！！」

「姫様、私なんて全くに近いくらい出てませんよ……」

「私も似たり寄ったりよ！！何であんな瞬間的にしか出ないのよ！？」

「アハハ……私は今回いきり出ましたけど今までなんか大して出てなかったですよ。まあ、オリキャラの忠次さんなんて始めだけしか出てませんでしたかね」

「というより、今回は語り部の役まで与えられたんです。正直、ずるいと思われま……」

「さて、次こそ私がその語り部を狙うわよ！！」

第十二話美濃脱出戦（前書き）

「……………伊勢太郎氏信！」

「はい！！！」

「前回の事、よくよく忘れてはいないよな？」

「ハハッ！！！」

「うむ。まさか、馬場を宛てるだけじゃなくあたしの台本にまで間違い予告を混ぜたんだ。ちよつとばかりか仕置きが必要だとあたしは思っただよなあ……………」

「いえ、流石にそこまでは……………御容赦願ひ奉ります……………」

「さて、どうしてみようかねえ」

第十二話美濃脱出戦

美濃まで兵を進める武田軍に、私は蝮殿相手に動けず仕舞いなまま部隊を動かせずにした。

何せ、織田信奈の軍が姉川の戦いにて朝倉・浅井連合軍を打ち破り美濃まで向かっているとの報せだ。

その上、松平軍が三河の兵を無理矢理かき集めてこちらに向かっているが

相模水軍が伊勢湾攻略を果たし安房水軍と合流し尾張まで向かい松平軍とぶつかる予定になっているが

奥州での伊達梵天丸殿こと伊達政宗殿が父輝宗から家督を奪い関東小田原まで向かっているとの報せが届いており

ただ今我が部隊は、勘助殿に密告し逃げ場が薄い退却戦を仕掛けようとしている。

「…………伊勢太郎氏信、その退却戦で修羅を見るか」

「ハハ、ただの退却戦ならばこんな無茶はしませんよ。何せ、敵陣に突っ込み正面突破する我が策で命が助かる奴なんざ私も含め可能性は無いに等しいですがな……………」

「だが、こんな無茶な退却を目にすれば虻には少しばかりは目眩ましになる。若僧にしては面白いやり方よ」

「まあ、折角武田から頂いた馬は幾つか無駄になるでしょうが…………勘弁して下さい」

「…………構わん。その後、松平の本隊に近付きながら退却するつもりであろう。太郎氏信殿。古河公坊を將軍家として迎える貴公等に頼みがある…………上杉家をそちが説得してみせよ。上杉は動きだしておるが、御館様の事だ…………この勘助亡き後も武田と織田の決着は着かぬであろう。とはいえ、武田がその間に上杉とぶつかっておれば織田に甲斐・信濃が飲み込まれる事も無くはない。そうならば、貴公等は何かと面倒であろう。そうならん為にも上杉家をお頼み申す。何せ、貴公は某の見立てでは御館様とは違うが、その戦い振りでは、何かしら覇気を持つべき者の一人と出ておるのでな」

勘助殿が私に覇気を持つ者の一人と悟るのを聞き何かと当てはまらないんじゃないかと考え込み

勘助殿は、苦笑いを浮かべながらも私の肩を軽く叩き信玄殿の下へ戻って行く。

そして、私も自ら率いる部隊に戻ると兵を整え蝮殿の部隊による鉄砲隊の被害を被りながらも敵部隊の真ん前を通り越し退却をしていく予定であつたが

見覚えのない甲冑姿をした一人の南蛮人により足止めを食らう。

「ここから先は、この聖ヨハネの騎士ジヨバンナ・ロルテスが通さん！！ジパングの冴えないサムライよ、勇気あればワタシと勝負しろ！！」

「ちいいい！南蛮人まで邪魔するか！！気にするな！！私と義重を先頭に鋒矢の陣形を保ちながら突撃する！！全軍突破を覚悟せよ！！」

「ちょっと悪いが、あの南蛮人の相手をやっても構わないかな？ちよつと興味深いんだ」

「ん？構いませんが、長引くようでしたら貴女でも待てませんよ」

「生憎、甲冑も着けてない私なら逃げ切れるから大丈夫だ。それに、強者と闘えるのなら一人の剣客としちゃ本望さ」

一刀斎殿は、馬から降りると愛用の刀を抜き南蛮人に一騎討ちを申し込むと

相手も一刀斎殿に合わせて馬から降り剣を抜いた瞬間

一刀斎殿は、瞬間移動でもしたかのような速さで間合いを詰め相手の首でも跳ばすかの如く身を低くした状態で横に剣を振るが

咄嗟に一刀斎殿の剣技を南蛮人は剣を降ろして必死に防ぐ。

「重そうな甲冑を着てるから、動きも鈍いかと思ってたけど……強ち、侮れないかな」

「ふん！キサマもなかなかやる。ジパングのサムライがたった数秒でワタシの間合いを詰めるとはな……だが、これで最後だー！」

「そんな一振りじゃ私は殺せないなあ」南蛮の武士さんモッソフ

南蛮人の一振りを身を右に若干避けてかわして、地面まで下がった

相手の剣に自らの剣で抑え込む一刀斎殿はニヤリと口許で笑みを一瞬浮かべると彼女の後方へと即座に回り込み頑丈に出来た兜に向けて足で踏み込み持ち手のところで強く叩き込む。

その反動なのか、南蛮人はゆらゆらと左右に揺れながら前へ地面へと倒れていき北条・武田軍の兵達から歓声の聲が響いて来る。

「まあ、そんな鉄鎧じゃ一騎討ちの際なら、逆に隙だらけだと思うんだが……次会う時には、軽装で闘う事をお勧めするよ。後、自己紹介が遅れたけどあたしは伊東一刀斎。単なる剣客さ……って気絶してる奴に言っても無駄か……さて、太郎も少し待つてくれた事だしあたしも移動するか」

一刀斎殿と南蛮人との闘いで士気が旺盛な私達の部隊は、織田の防衛隊を前に退却していき

後方から来た松平勢に突撃を仕掛けるがそこには平八郎とヤスが待ち受けていた。

「フフ、ここまで士気が旺盛な部隊を相手ですと厄介だな……」

「……………油断出来ない。このまま守りきらないと……………信玄に追い付けない」

「さてと、太郎殿。鋒矢の陣をこのまま崩されては兵の士気が落ちるであろう。貴方の背後は、いつでも護ってやるぞ」

「ふつ、義重殿ならば大丈夫と言いたいところだが……厄介だな。今の二人は松平元康の双壁と考えていい位の腕を持っている。それに、今回はあくまでも退却戦……ここで、一騎討ちをするより突撃を仕掛けようと見せかけ尾張の港町まで逃げるのが本来の策だ。向こうも鋒矢の陣でぶついている。ここで、ぶつかれば織田の部隊と挟撃を受ける事となるだろうが……変わりに尾張まで兵を回してまで向かっている織田軍とぶつかるでしょう。とはいえ、尾張に向かえば里見義堯の部隊と合流出来る筈だ」

松平勢を相手にしようとしたところに織田の部隊が挟撃に回していた展開に私は、思わず狂ったように爆笑する。

その姿に周囲の兵達が急に大人しくなったが私は、何も気にする事なく挟撃を仕掛けようとした部隊に長蛇の陣を指揮して尾張へ目掛けて突撃を仕掛けるが

突如、曇ってきた霧に兵達は脅え向こう側から種子島による銃弾で倒れ込む兵達も続出し

私も尾張まで辿り着き合流地点の間際というところで明智光秀の部隊が待ち受けており

後方より、丹羽長秀の隊が向かっている。

「……………見事に挟み撃ちを受けたものだな」

「さあ、ここで素直に降伏するです！！でなければ、こちらから貴方の部隊に総攻撃を仕掛けます！！」

「ああ、金槌頭が待ち受けてたか……とはいえ、ここまで鉄砲を担いで待ち受けられれば確かに、厄介だが……そろそろ待ち合わせの相手が来るんでね。あまり遅れると色々怖い御方なのですよ」

「だから、私は金槌頭ではなく近江坂本城城主を務める明智十兵衛光秀です！何度、言ったら覚えるんですか！！」

「……………城持ちだったのは聞いてないけどね。まあ、そんな事より君が護ろうとしている町が火の海と化しているぞ？まあ、私には関係無いが……あれでは、尾張の財を支える津島の町も焼け野原だな」

光秀が私に目を向けて部隊を展開している間に義堯殿率いる安房水軍が尾張の港町である津島に着き船を停泊させた後に火を放っているのを確認する私は

動揺を隠せないでいた明智軍に残り少ない突撃を仕掛ける間に明智十兵衛が、呆然と構えていた種子島を落としそうな隙に構えていた太刀で彼女を斬り落とそうとした瞬間

後ろから種子島の玉が太刀に当たり手から離れたところを明智十兵衛が私の腹部に刀を突き刺すが咄嗟に左側へと払ったお陰か大動脈がある中央を避けたとはいえ、かすった程度に弾が腹部に当たったせいか

思わず左腹部を抑え込んだところに集中したせいで気付いたら後方より丹羽長秀が妖艶な笑みを浮かべたまま太刀を抜きこちらに近付いている。

「流石は、左近さん。安房水軍に津島を落とさせてでも逃げ場を確保したところまでは、八十点と言いたいくところでしたが……私が光秀さんの優秀な鉄砲隊を借りてた事も気づかなかったのが致命的だったかもしれないですね。その油断からして四十点」

「さあ、左近さん。降伏するなら今の内です。でなくては、この場で命わ失いかねませんよ」

「ふつ、元より戦場で命が尽きるのは覚悟の上でしょうが……殺すならさっさと殺しなされ。とはいっても貴公等は、安房水軍を率いている者の恐さを知らないだろうがな」

安房水軍を率いていた里見義堯の部隊が明智軍の背後を狙ってくれたお陰で待ち合わせの船に生き残った兵達を急いで乗せ終えた後

私達の生き残った五百余りの部隊は、安房水軍と共に急遽伊勢を潰した相模水軍と合流し

氏康様が籠る小田原城防衛戦の戦支度を整える為、一旦伊豆へ兵を引き返す指令を出す。

次回予告

「ん……………」

「ようやく、目覚めたか…………さて、太郎氏信。あたしを欺かせるなんて大した度胸じゃないか？まあ、何をされても文句は無いな？いや、お前に発言させる権限なんぞ与える気も無いがな」

「アハハ…………何の事でしょ？私はただ馬場殿がどうしてもやりたいたと仰っていたので御希望にお答えしただけで…………ってその目だけ

笑ってない笑いが怖いです！！わ、分かりました！！何でも言う事
き、聞きます！！」

「なら、さつさと謙信ちゃんを出してあたしと闘う場面を作っても
らいたいもんだ」

「……………アハハ。それ無理です。原作で思った以上に出
なかつたので出せないっす……」

「……………そうか。なら、あんたが密かに通じてる作者に伝えな。さ
つさとあんた以外での相良良晴の宿敵役を出すかそれとも山県と結
ぶかの二択を与えてやる。それ以外は、死罪だ」

「はあ！？どれも難問過ぎる！！ならば……………相良良晴の宿敵役
の方ですが……………史実では、武田家でも兵を扱うのが上手で甲斐天目
山の戦いでも病で倒れててまともに出れなかったが、出ていたら戦
況を覆すとまではいかなくても織田を少しでも苦戦させていたであ
ろうと作者的にも思っていた鬼の子とも謳われし小幡昌盛殿・武勇
では東美濃まで攻略し、武田家の力が弱まった後も戦い続け最期は、
織田側に処刑された秋山信友殿など武田側のみなら絞り込んでます
が出さなくても良さげな感じもあるんですよね……………因みに、上杉
家ですと武なら本庄繁長殿、内政・外交ならば千坂景親殿と考えて
はおられますが……………読者さんに伝わりやすい人物がなかなか思い
付かなかつたりしますからな……………」

「ふうん。一応は考えてはいたんだな………つまん。だが、これでは、宿敵役は出せんだろうな。ならば………」

「ま、待つて頂きたい！！（流石に、鬼嫁みたいなお方が来られたら私の身が持たん）い、一応絞った人物としては小幡景盛殿が千坂景親殿のどちらかまでは、絞っております。ただ、感想欄にも特に意見も無いため出さなくても良いんじゃないかと思ってまして………」

「なるほど。お前を弄ってもつまらん事がよくわかった。今回だけは、見逃してやろう」

「ハハッ！！次回は………」

「奥州から来た邪気眼娘だ。アッハハ！！やはり、お前は弄りがあるな」

「もうこの人と一緒に嫌だあああ！！」

「因みに、その次回辺りには番外編を載せるつもりか………」

「ネタバレも勘弁して下さい！！！！！！」

第十二話美濃脱出戦（後書き）

時は、一年前

今川・武田・北条家の三国同盟が成り立っていた頃

あたしは、今川に一、二年前から属していると聞いていた吉良義康という奴がわざわざこの甲斐までたった数名の供を率いれ駿河から購入した塩を運びに来たと聞き

ちょっと暇潰し程度に二、三十くらいの兵を賊の格好にさせて奴を襲撃してみる事を試みていた。

「さてと、供の見張りもそこそ甘そうないつをどう脅かしてやるうか……………」

「御館様、吉良義康という奴相手に某まで加えるとは如何なされましたか……………」

「ふむ。確か、昌盛は勘助が見立てた後継者だったな」

「いや、一、二年か前だったかあの虎盛とか名乗る鬼親父と鬼の義理父とか勝手になった虎胤殿・勝手に弟子にされた挙げ句に戦場へ投げ捨てやがった鬼師匠の勘助殿に拾われたせいで俺の人生は真っ暗っす。その上、昌胤とかいうあんな木刀片手に某プロレスラーの嫁が放つ悪鬼羅刹な雰囲気を見せる鬼嫁に逆らえないという地獄絵つすよ。それに、あいつ高校という名の学舎で一緒でしたが、卒業後は互に行方を告げなかったただけでしたけどね」

「何かよくわからんが、夫婦としては上手くやってるようだな」

「いや、上手く言っていないっすよ！！何すか？信廉様に告った翌日から虎盛のくそ親父から無理矢理養子にされた上に名前も改名されちゃって厳しい教育に未だ続いているんすよ！！それで、次に川中島で高坂殿の監視って俺に何の恨みでもあるんすか！？まあ、高坂殿は可愛いから俺の癒しの場でもありますけどね」

「あつ、因みにあいつに手出ししたら次は馬場の配下に一生置くか、山県の傘下で骨の髄まで叩かれるかの二択を与えてやるから覚えとけよ」

「ハッ（。口。；！了解致しました！！」

「よし！！ノツポ・蔭薄行くぞ！！」

「いや、何がノツポだ！！小幡昌盛って名になってますから！！」

「そうです!! 私と昌盛殿と一緒にしないで欲しいです!」

「あれ? 内藤殿。いついた?」

「黙れ!! お前なんか一生、鬼に弄られてればいいんだ!!」

「いや、それ勘弁して下さい!!!」

「……………本当、お前等二人は飽きないな。いつそのこと摂津へ行け」

「私（俺）はお笑いじゃないです〜！（ないっす!!）」

「息まで合ってるな。よし芸名は離縁寸前で浮気のノツポと景薄だ」

「ウウ……………」

「……………御館様、俺の人生で遊んでますな」

第十三話奥州から来た邪気眼娘（前書き）

「って、出番が無いではないか！！小十郎おおお！！」

「だ、だってこっちは、伊勢さんと接点無いじゃないですか？それに、私達が出るのは次の話で相良良晴さんという御方と共に出るらしいですよ」

「な、何iiiiiiii！で、ではあいつが私の者になるんだな！？いや、その筈だ！」

「とはいっても、あくまで番外編みたいなものですからね……でも、何か次回の話ではちょっとスゴい展開にはなってるそうです」

「その様だな！！よし！！このまま小田原を陥落してやろう！！フフ、次の話楽しみだな」

第十三話奥州から来た邪気眼娘

美濃から無事に逃げ切り相模・安房水軍と共に伊豆へ一旦戻った後、常陸が太田城まで取られたり

武蔵も江戸城が落とされなかったとはいえ八王子城や忍城など陥落された上に上野一国まで占拠したとの報せを聞いた私の年末年始はまだ伊達が上野から向かつてる最中の小田原に無事到着した上に迅速なる武田騎馬隊を迎え入れたりとゴタゴタ続きだったせいか

ただ今、私は屋敷でのんびりと横になって休んでいた。

「そういえば、武田も軍師殿が亡くなりそろそろ四十九日を迎えるとか聞いたが……武田は、あの軍師以外に軍略でも優れた奴でもあるのか？」

「……………いきなり何を言うかと思えば武田の事か。まあ、私もあまり詳しくは知らんが噂では、小幡昌盛殿という武田四天王が一人内藤修理殿の副将を務めてる者が継ぐのではないかと騒がれてたが……裏でも小幡殿は、武田と織田が良好な関係になった暁に槍弾正と恐れられし老将保科正俊殿を始め土屋昌次殿・元奥方であられた原昌胤殿・横田康景殿・甘利信康殿・板垣信憲殿といった武田家に

古くから仕える者達が諏訪の生き残りでもある四郎殿を担いでも
対織田包囲網に乗り気だと聞く」

「……………主に叛いてでも諏訪の血を利用してでも織田とぶつかる
といった魂胆か。それに、噂じゃ武田信玄は古株だった家臣と距離を
置いていたとも聞いてたが……………裏で小幡って奴が纏めてたなんて
知らなかったわ」

「アハハ、無理もない。こんな情報……………忍に探らせん限り掴める
話ではないからね。前回の織田攻略戦でどうも武田の主力が思った
以上にいなかったのが気になりちよつとばかりか個人的に調べたま
での事だつていうことさ。ただ、板垣信憲殿は父信方殿と違い信玄
殿に忠義的な人物でないと聞いてたが……………何か引つ掛かるな」

「それは、信憲の才覚を信玄が出せなかったただけではないか？だが、
私が信玄だったら小幡昌盛って奴を泳がせてみたいところね」

私は、細くて短いが白い肌に艶のある義重殿の膝枕で休みながらも
彼女に耳掃除をしてもらったりしており

幼女好きな男がおれば確実に命が狙われるであろうが

私の屋敷に来る者は、義重殿以外に来るとすれば、大抵時間潰しに
己の太刀でも手入れする源四郎殿や、安房の魚と酒を持つてくる義

堯殿が任務の以来や伝令役として来る風魔の忍くらいな為

小田原で一番平穩に過ごせる場だったりする。

ただ、最近じゃ一刀斎殿も伊豆に金槌頭を誘えないからとわざわざ近江坂本まで向かってるらしいしその次いでにでも京の吉岡憲法と手合わせすると言い残して旅に出ており

今、我が身を護る護衛役がないという理由で義重殿が泊まりに来たお蔭だろう。

最近では、元々お姫様育ちしていた義重殿が全く家事が苦手だった事もあり

小田原の屋敷で使用人や侍女を雇わない私は、彼女が来たという理由で釜で飯を炊いたり漬けておいた白菜に町で仕入れた魚など焼いて彼女の飯まで用意している。

因みに、一刀斎殿と二人の時は飯など外で食べたりしていたが義重殿が外で食べるのにゴタゴタと騒がしいところが苦手という訳で殆ど人が来ないのがわざわざ自炊している訳であつたりする。

「ああ……なるほど。若いとはいえ流石は常陸を纏めてた大名では

あつただけあるな。それに、その信玄殿が小幡昌盛殿をお連れする訳も納得出来る」

「……となれば信玄がどうその小幡昌盛とかいう奴を扱うかが気になるわ」

「アハハ、武田四天王の意見が極端に割れやすいからね。大方、勘助殿の弟子として如何程の才を持っているか見極めたいんでしょう。にしても、小幡昌盛殿が陰で作っているとされる面子くらいは見てみたかったけどね……」

私は、小幡昌盛殿が密かに集めている配下の者達を気にしていた時だった。

忍の者から信玄殿が四天王をひき連れ氏康様がいる屋敷へと集まっているから繰るよう命じられており

急遽、小田原城内にある氏康様の屋敷へと向かう。

「あら、太郎。丁度良かったわ。ねえ？貴方なら今の事態で逃げるか戦つか事を慎重に見つつ一戦構えて実力を計ると選択があればどれを選ぶかしら？」

私が来た頃には、氏康様が武田四天王の意見を終始聞き終えた後だつたらしく源四郎殿が何故かこちらを睨むような目で見つめていたが

気にしたところで特に意味がないであろうと心中悟りながら氏康様に向かつて真正面の位置に座り私は、その場で頭を下げて己の意見を語る。

「……………恐れながら、私ならば三者の意見を無視し、敵の動きを風魔に探らせつつここで様子を伺います。それに、伊達は数多の戦で領土を広げた分、数多の戦による兵の疲弊に田畑を疎かにし、周囲にいる者達の不信感も強まり内通もやりやすくなるでしょう」

「そうよね。私もその方が良いと思ってたところよ。やはり、私の目に狂いは無かったわ」

「ふん。相変わらずお前達は小憎らしいな。だから、太郎もそのままだと一生結婚出来んぞ？」

「他人の家臣の事までご忠告ありがとうございます。生憎、太郎は、ここに仕えた時から私だけの者だつて決まったようなものだから、結婚なんて甚ださせるつもりも気無いわ。それより、男達から”甲斐の虎”と恐れられて、周囲を女の子しか集められない貴女はどうかしら？」

「あたしは、お前よりモテるから構わない！あの、ほら、織田のサ

ルがいるだろう。相良良晴。あいつは、あたしの胸に夢中になっていたぞ！あいつはおっぱいがでかい女が好きだと豪語していた。お前のような胸の薄い女にはこれっぽっちも興味を示さないだろうな！ざまあ！」

「ったく、その相良良晴つつ奴は御館様の男勝りで手が付けられない上に、たまに職務を我が麗しの信廉様にぶつけたりして好き放題なさってるという事を知らんのですよ。全く能天気でガキ臭い典型的な奴なんですよな」

「……………たまには、あたしが直々に可愛がってやらなきゃならんよ。うだ。お前は、内藤や高坂の配下じゃ甘いようだったな……………孫十郎」

「い、いやゝお、俺何言ってるんすかね……………御館様の美貌にや敵いません。ええ、胸が大きい上に体つきがいい御館様に男が惚れない訳無いっす！だ、だから……………ま、まだ高坂殿の配下がいいっす！って、高坂殿？何陰薄な内藤殿を取っ捕まえて逃げてすか！！あっ！？馬場殿・山県殿も目を逸らさんで下さい！！お、御館様……………その拳だけは御勘弁を！！だ、誰か！！い、伊勢！ここがお前さんの知恵の見せどころだ！！って、無視すんな！！意外と俺達、古い仲だろ？」

何か助け船みたいな声が聞こえたが、私も甲斐の虎と迂闊に敵対出来ない為

ただ、目を逸らしたかったところだったが我ながら思わぬところで
つい口が開いてしまう。

「……………にしても、男に恐れられし甲斐の虎ともあろう御方が異性
の名を覚えているとは珍しい事ですな。さては……………奥方殿であつ
た原昌胤と別れて以来、小幡殿が板垣信憲殿・甘利信康殿・横田康
景殿の三人に夢中とかいう噂が原因ですかな」

「い…………伊勢？お前、その噂何処で聞いた？」

「いや、先の織田・松平との戦でそちと連携を組んでた時に兵達
が流してたのをたまたま耳にただけなんだが……………確か、あん時は
三人にメイド服とか着せてるとか聞いたな」

「な、何じゃこりやあああ！？御館様、何ニヤリと笑ってるんす
か！？犯人は貴女ですかあああ！？」

さっきまで拳を作ってた信玄殿が何故か小幡殿の前で腕を組んだま
まニヤリと無言で上から見下ろしながらも

耳元で何か呟いていたが、その後に私の前へ近寄り”次に変な事を
呟いたら伊豆に侵攻してブツ殺してやる”と囁かれた時

何故か、私はその場で膠着し信玄殿が小田原に用意してある高級旅館へ帰った事により氏康様との話し合いが一旦終える。

「ちょ、ちよつと待つて下されえええ！この内藤修理を忘れな
いで下さいいいいい！！」

「そういえば、四天王で小幡と漫才を組んでた奴がいたわね？」

「おも」

「遅い！」」

「し
ろ
い
ふ
た
り」

「いや、お笑いで組んでないから!!」

「一言一言合つてますね。本猫寺に行けばいいのでは……」

つてすみません！！余計な事をもう言いませんら、お願いですから睨まないで下さい！！」

内藤修理昌豊・小幡孫十郎昌盛と後に二人の共通の名を一字取って
”両昌”というお笑い漫才が甲斐に広がるとの噂が後に、信玄殿が
広げる事になるとは

この時、誰一人も気付こうとは思わなかった。

次回予告

「今回は、番外編孫十郎と三人の侍女……………」

「つてなるかあああ！！この陰薄があああ！！」

「お嬢様の鬼畜野郎と噂されるよりマシですから！！いや、孫十郎も面白い二つ名を頂きましたな。次回……………」

「番外編、相良良晴の天下分け目の小田原城攻略戦、信奈の野望を
継ぐ未来人、いざよろしく願いします」

「あああああ！台詞、奪ってる」

「いや、ここまで声が合つと退きますな……………」

「黙れ！氏康の飼い犬！！」

第十三話奥州から来た邪気眼娘（後書き）

おまけ話とある孫十郎の一日

俺の一日は、やや茶色くて肩まで長い髪をストレートに伸ばしきつたまま背丈や胸の大きさが御館様と似ているが常にビクビクと怯えているドジっ娘メイド服を着こなす板垣信憲と紫色の髪をショートにし信憲より一回り背丈は低い上に胸も普通にあるくらいで隣にいる信憲より一回りは何でも小さいのにも関わらず俺よか武器の扱いが上手いツンデレな性格で信憲と同じ赤と白を強調したメイド服を着こなす甘利信康が二人がかりで起こすところから始まる。

因みに、二人共まだ十六歳なんだが親父さんが信濃攻めの際に亡くなった後から御館様から遠ざけられてるんで俺が拾ってるのは実はあまり知られてねえ筈なんだが最近じゃ御館様が広げてた事にはちよつくら頭を痛めていた。

「…………ま、孫十郎さん。きよ、今日から御館様が織田と戦う為に駿河へ向かわれております…………ど、どうしましょー」

「ふん！！アンタの事なんてどうでもいいんだけど私と信憲は互いに父上が亡くなってから御館様に離れられてる身なのよ！！あんた

が真面目に仕事しなきゃこっちは明日が無いようなもんなの!! 分かってるの!!」

「あ、ああ……まだ眠い。昨日、昌胤と喧嘩して疲れてんだ。今日は休みな」

「……でも……康景さんが朝食を作り終えてます」

「……ったく、流石俺の右腕だな。しゃあない。朝飯でも食うか」

布団から起き上がると信康が何か顔を赤らめながら俺に着物を着させ”アンタの為じゃないんだから”なんてブツブツ呟いているのを面白そうに聞きながら俺は黒髪が腰まで長く胸は御館様と同じ位なんだが身長が信康と同じくらいというロリ巨乳みたいな童顔が特徴的なんだが家事なら何をやっても全て済ませられる横田高松つつ御館様がとある戦で敗戦した際に殿を務めて戦死して以来、存在を隠してた一人娘であるメイド服を着こなす信康や信憲と同一年である横田康景ちゃんの調理を頂く事が俺の憩いの一日の始まりである。

「あら? ようやく起きましたか? 全く今日はめっですよ!! めっ」

「あはゝ康景ちゃん是和めるわ」

「あう……………康景ちゃんだけ頭ナデナデするいです」

「ふん！デレデレしてキモいからさっさと飯くらい済ませてよね！
」！」

「まあ、今日くらいのはんびりさせろや。俺あゝここまで平和な一日が送れて幸せだゝ」

俺の一日は、いつも和みが尽きない。

番外編相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦、信奈の野望を継ぐ未来人（前

本能寺の変がもしも起きたらどういう展開かとか無理矢理作ってみた番外編です。

番外編相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦〜信奈の野望を継ぐ未来人〜

十兵衛ちゃんによる謀叛で信奈が本能寺で討たれた後

織田派についた毛利・本猫寺・十河・大友・武田・伊達と味方に着いた奴等もいたんだが

武田領内じゃ信玄を中心とした相良派と小幡昌盛って奴が四郎ちゃんを担いで諏訪家再興派なんざ派閥が出来ちゃったりして武田家中の雲行きが怪しかったり

その間にやまと御所の関白近衛前久が周囲の公家を一纏めしやがって今川義元を征夷大將軍の座から降ろした代わりに足利幕府を再興させる為だとかで古河公方つつう関東の足利家当主を務める足利義氏とかいう奴を任命しやがったせいか

梵天丸に恨みがある奥州連合や四郎ちゃんまでもがその協力関係につきやがった。

その後、九州からも島津が織田に反旗を覆し大友領内を侵攻し、龍造寺でも島津と手を組む為だとかで鍋島直茂って奴が下克上したり

北陸でも謙信ちゃんが信玄と決着を着ける為に北条と手を組みやがってやがるし

俺が信奈の後を継いでから各地での戦が収まらない状況だった。

その上、梵天丸こと政宗が元康・信玄と手を組み最も東でデカイ勢力を誇る北条包囲網なんざ用意していたから

俺も姫巫女様に勅命をもらって向こうを朝敵にさせようと画策したんだが、姫巫女様がいくら偉くても関白の近衛前久が五摂家を束ねて権力を握り続けている限り何も出来ないって姫巫女様の側にいた公家が残念そうに言ってたな。

だが、もつと解らなかったのが十兵衛ちゃんに謀叛をそそのかせたつつポイントを考えれば信奈が生前から潰そうとしていた朝廷サイドによる黒幕説や足利義昭の黒幕説などが有名なんだが

それも、関係無く十兵衛ちゃんの手勢は信奈が泊まっていた本能寺を焼き払った後

摂津に停泊していた織田に潰された三好家傘下の海軍でもある淡路水軍の残党が拾ったとこまで九鬼水軍も確認済みで伊勢を渡った際

には、一益ちゃんに迎撃準備を整えさせたにも関わらず謎の大型船の来襲で伊勢の戦力が大幅に削られたという報せが届き

十兵衛ちゃん率いる淡路水軍の残党が尾張に停泊して以来

俺達は、搜索隊を尾張・三河まで展開させたんだが十兵衛ちゃんはおるか彼女が率いていた傘下の有能な部下まで行方が掴めない状態が続いちまった。

その後、信玄から北条の水軍が自分達の駿河水軍を壊滅させ伊勢へ向けたとの報せを受け取り俺は、九州攻略を長秀さん中心に毛利・長宗我部・十河といった西の勢力に大友救出戦という名目で指示を出し

北陸は、加賀や越前を治める勝家や犬千代を中心に畠山・神保・姉小路といった能登や越中・飛弾など各地で勢力を保つ奴等に謙信ちゃんと対峙する為の防衛戦を展開させ

そして、俺は本猫寺・雑賀衆・浅井・武田・松平・松永と総勢力でざっと畿内と中部の兵をかき集め二、三十万の部隊を率いて小田原城の包囲をしつつ伊豆を元康と長政・久秀の部隊に向かわせ後は、石垣山に城を築かせ無血開城を計るつもりで奥州からも政宗を動かせた筈だったんだが

政宗が、常陸の鬼佐竹とぶつかっていた間に背後から蘆名・相馬・最上・南部・大崎・葛西といった政宗に従っていたふりをしていた奴等がクーデターを起こし背後を突くように潰しかかり

政宗が俺のどこまで退却した時は生き残った兵も百にも満たない数だったのには、俺は思わず握っていた軍配を落としちまった。

また、石垣山に山城を築かせ氏康に降伏を促せるという策も城が完成し周囲の木々を切り落とし天守閣がくつきり小田原まで見えるようにしたと同時に信玄の部下であった小幡昌盛って奴が城内に火を放たせ俺達の部隊は混乱に陥ってるた。

「申し上げます！小幡昌盛殿が津田様の後方部隊を襲撃しこちらに向かっております！！」

「た、大変です！！甲斐では、四郎勝頼殿わ担ぐ小幡派の原昌胤殿・板垣信憲殿・甘利信康殿・横田康景殿が躑躅ヶ崎館を占拠し、四郎勝頼様こそ我等の主と言わんばかりに立ち上がり下山城・岩殿城まで陥落致しました！！」

「ちっ！展開が早いな……石垣山城は放置だ！！信玄ちゃんの部隊と共に駿河まで退却してえが元康達も見捨てられねえな……」

「も、申し上げます！！天海と名乗る黒髪とおでこが目立つのにも

関わらず顔を布で隠す怪しい輩が……………ガハッ!!」

「先輩、このじゅう……………いいえこの天海が貴方様を食い止めるです」

俺の目の前には伝令の兵を後ろから突き刺す包帯で顔を隠し、血に染まる紫色の僧衣を着こなしていた十兵衛ちゃんが血で染まった刀を片手に近寄っており

槍を握ろうとしたところをあいつが即座に構える刀を俺の喉仏に向け

俺は、思わず両手で握った槍を地面に落としちまった。

「……………伊勢さんの読み通りでした。先輩の事を野心強く主君思いかもしれないが、全部を掴もうとしがちに見えるから目先の目標しか見られないであろうと……………海の向こうに目を向き過ぎて、南蛮の者と馴染めない立場も考えずに南蛮寺など建てられ民の信仰に染まればそっちの国の考えに染まる者が増えるばかりに伝統ある寺や神社の立場が無くなるでないと疑念を抱いております。確かに、南蛮の文化はこの日ノ本より進んでいるかもしれないでしょうが、向こうに優しく過ぎれば行き場を無くした坊主や神主が民にこう進言するです!南蛮に染まれば八百万の神や仏による神罰やら天罰が下るであろうと!!それに、この戦で行き場を都や堺の南蛮文化の広がりが原因で、行き場を無くした坊主や神主達が越後やこの相模まで移住している意味をまだ分らないと嘆いておりますぞ!!」

「だがな！それじゃあ俺と信奈が考えた日本をヨーロッパに追いつかすって目標が叶えられねえんだ！！それに、十兵衛ちゃんや氏康の考えが過激になればフロイスちゃん達みたいなキリスト教徒の信者の迫害も起きかねないんだぜ？それは、十兵衛ちゃんもわかってる筈だ！！」

「それでも、あの者等に帰る国はあるです！！ですが、相模や越後まで移住した坊主や神主には上杉謙信や北条氏康など拾わない限り生きる場が無いのです！それに、他国の者をあまり多く住まわせればこの国の事を母国に報告する密偵の者まで現れかねません。そうなれば、南蛮から侵攻される恐れもあるかもです！また、何かあれば他国とどう付き合うつもりなのですか！？もし、他国との問題が起きれば日ノ本国内は、南蛮人を敵にするか否かで今より揺れるかもしれないです！後、南蛮との国交付き合いですが……数多に広げる必要が無いというのが、上杉と北条が交わした伊勢さんの越相同盟の一つであります！！そして、その同盟には、奥州の諸大名や諏訪家も加え日ノ本の東側くらいは、固めるというのが北条の画策なのです！！」

なるほどな。

やっぱ、伊勢の野郎は侮れねえぜ。

あいつは、俺からみたら必要無い古いしきたりを利用して公家達を

纏めさせてやがるし、スペイン帝国が植民地を広めてるのも知ってやがる。

だからこそ、他国との干渉に介入し過ぎないように貿易する国々を少なくしておき、国内を纏めやすい方法で纏めておいた上で内政に力を入れようとしてるつつう考えを信玄のどこに來た時

伊勢や俺と同じ境遇だとか言ってた小幡昌盛って奴から聞かされた記憶がある。

だが、俺はそれでも伊勢や小幡のやり方を認めるつもりもねえ。

じゃなきゃ、信奈と築く筈だった色んな国々の文化を取り入れ古いききたりをぶっ壊した皆が皆、自由に暮らせる国を築いてみせるつもりだ。

まあ、信奈が生きてりゃ二人で世界進出でもして後の事を元康に託す予定だったんだが

信奈がいなくなった今じゃ、俺があいつの夢を叶えてやらなきゃいけないような気がする。

ただ、長秀さんに勝家・久秀・犬千代・五右衛門・元康に西国攻め

の時まで病弱な身体を駆使して毛利と和議を勧め最期は、俺が抱きしめた中ゆつくりと息をひきとちまったが半兵衛ちゃんも命尽きるまで、俺や信奈の夢を叶えようとしていたな。

また、官兵衛も俺の夢を叶えるべく策を練って燃えかすとなっちまったが石垣山に城を築城させたり

伊豆にいる伊勢を相模へと向かわせねえよう元康や久秀に攻め込ませた案を練ったのも彼女だったな。

そして、俺が十兵衛ちゃんから聞いた北条氏康の画策を嘲笑うよう”小せえな”と一言呟いた時だった。

俺の後ろをとった赤備えの甲冑と鹿の角が目立つ兜を装着し槍を片手に現れた長身で体つきがいい男が来やがった。

「……………全く、餓鬼の戦にや付き合ってらんねえな。いくら、デッカイ夢を持つても伊勢みたいな野郎を見くびってたんじゃ天下なんて取れなかったろう？その証拠にお前さんは、あいつを伊豆から出られないよう封じてたところに目を向けすぎて俺等の動きを見切っちゃいなかったんだ。まあ、あいつを伊豆で囷にさせた事で満足させるのが、あいつの策なんだがな」

俺と顔を包帯巻きで何故か隠している十兵衛ちゃんが二人きりで向かい合っていた時

そこに、現れた奴はつい数日前まで信玄の補佐役みたいな位置について軍議まで出ていた小幡孫十郎昌盛だった。

次回予告

「あら、思ったより番外編が終わりそうも無いわね」

「……………ですね。何かこの話だけは最初だけ思いっきり話を簡略に書こうとも考えてたらしいですがそうしちゃうと何の話かわからなのまま終わるからと却下したらしいですぞ」

「なるほどね。それにしても、まだ本編じゃあの付き合っのが難しい越後の龍すら名前だけでだして誤魔化すのに必死なのでしょうけど下手に出せば本編で出た時、読者が混乱するのではないかと考えて出さないつもりなのでしょう？」

「……………そうなりますね。ただ、上杉家の家臣が全く出ないのも話としちゃどうなんだろうという事で一か八かの賭けで柿崎景家・上杉景信・北条高広・斎藤朝信くらいは……………と考えているらしいですが、詳細は一切不明ですね」

「……微妙なところね。ただ共通点はあるのでしょうか？」

「……………そうですね。三人共史実では、謙信亡き後の家督争いでは、長尾家出身の上杉景勝側ではなく北条側の人質にて謙信の養子となつた景虎を推す家柄という点だったりしますね（まあ、朝信は御館の乱での途中で景勝側へ寝返りますが…………）」

「要するに上杉側の援軍役も上杉家中でも私達を推す側という設定にでもする訳ね」

「そういう事で御座います。では、次回も番外編相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦、信玄と昌盛、是非ともよろしく願ひします」

番外編その弐相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦ゝ信玄と昌盛ゝ（前書き）

ああ……………早く本編の氏康様が見たいです

番外編その弐相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦／信玄と昌盛／

あたしが孫十郎を拾ってもう四年近く経ったとある蒸し暑い日の晩

過去に幾度となく松永弾正から自分のどこへ引き渡すよう文が届いてたがあたしは、その文に断りの返事で何度も跳ね返していた。

まあ、その理由があいつが思ったより配下の女達に手を出さなかった事と板垣信憲や甘利信康・横田康景などあたしですら最大限に引き出せなかった武将としての能力をあいつは、見事に引き出させてあいつ自身彼女達が武将として生き残れる心の拠り所と化していたんだ。

そんな奴を織田に送ってしまえば彼女達があたしに反旗を起こすのだって目に見えるような気がして、奴を側に置くか否か妹の逍遙軒から意見を聞けばいい加減、孫十郎を一人の男として認めてやらなければ、あいつは四郎を本気で担いででも謀叛を促すような事言ってたが

その原因が何故なのか意見として聞きだしてみれば、相良良晴を夜な夜な自らの屋敷に連れ出したのが頻繁だというのがそもその発端だと述べてたな。

まあ、あいつを夜な夜な呼びつけちゃ夜遣いに見えても仕方がなかったんだが……

あたしは、何故か相良良晴なんかに身体を許す気なんて更々なかった。

むしろ、氏康が伊勢太郎以外に己の本音を告げないのと似ている点があると思われても否定する事が出来なかったりするんだが

昔みたいに、共に馬に乗ってスカツと汗を流したりちよつとしたり、勘助の愚痴を聞いて貰ったりと幾らか付き合ってくれてたのに

今じゃ四郎に軍学やら築城・農学など直々に甲斐の農村や城下の市へ連れてつたりして教えて今じゃあいつは、四郎からあたしと大差歳が変わらないのにも関わらず”お父上”とまで呼ばれてやがるのを見かけた時は何故か、四郎が羨ましく思えたのは何故だ。

最近の孫十郎を考えれば完全に何か裏でも無くちゃあたしの中では納得出来ない。

だが、そこで何で納得出来ないかと言われたら黙り込んでしまっただよなあ……

「御館様！！小幡昌盛殿が石垣山城に火を放ち相良良晴の本隊へ突撃を仕掛けてる模様！！」

「……………つたく、何モタモタしている！！あいつは、この信玄に牙を向けた反逆者だ！！後、小幡孫十郎の部隊には山県と内藤の部隊が左右に配置されてる筈だ！速やかに迎撃を仕掛けてあいつを生け捕りにしろ！！」

「も、申し上げます！！相良良晴殿が撤退準備を進めるよう指示をなされておりますが如何なされますか！？」

「あたしは、あいつの傘下に加わった気は更々無いと跳ね返しとけ！！ここで、氏康に背後を向ければ確実に迎撃されるのが関の山だ！！まずは、小幡孫十郎をぶっ叩かないと気が済まない！！」

過去を振り返って気付けば、あいつの事ばかり考えてたなんて甲斐の虎とも恐れられたあの異名が今となっちゃ笑い種だな。

まあ、急いであいつのもとに駆けつけた時には、あんな猿の首を斬り落とそうとしていた孫十郎と顔を包帯巻きで隠していた女が映っていたけど

そんな女を大して気にもしなかったあたしは、思わず孫十郎に近づくと咄嗟に奴の頬を思いつき殴り地面へと叩き落とす。

それを相良良晴は、啞然と眺めてたけどあたしは、孫十郎だけは地面から這い上がろうと必死に立とうとするが

山県や内藤の部隊から駆け抜けたりしたせいもあり地面から無理に這い上がった奴は、あたしを睨み付けるが

孤立していた相良良晴の下に数名の兵達が駆け付け最早、戦う体力も殆ど残されていなかった孫十郎を囲む。

だが、甲斐の鬼神と謳われる奴は使えない槍を投げ捨て懷から太刀を抜き取り向かってくる奴等を次々と斬り落としながらも猿の首でも狙うかのように前へ進んで行き

流石の命知らずな相良良晴も脚を震わせながら槍を構えて逃げ腰な姿勢を見せている。

まあ、あたしの傘下でも化け物の部類に入ってもおかしくない奴等に鍛えられた奴だ。

あいつが、脚を震わせ腰を抜かすのも仕方ないように思えるが

あいつの前で、その行為事態が許されないだろうな。

何せ、あいつを鍛えた奴等は、北信濃攻めや川中島でも死期を悟って散っていったり戦場で死ぬ間際になっても闘う事しか考えていない奴等ばかりだった。

そんな奴の前で腰を抜かせば、只では済まさんだろうな。

「立てや小僧！　！　たく、テメエは己の為に命張った奴等を見捨てて腰を抜かすなんざどうい道理だ？　兵を率いる大将ならこいつらの立ち向かった覚悟でも見守って指揮するか何かやらねえか！　！　俺は、口先だけ一丁前でしゃばる奴は腹立つんだよ。そんな覚悟で伊勢の野郎や北条を治めるだあ？　まあ、そんな覚悟じゃ俺が寝返る必要も無かったな。御館様を夜遣いで抱いた事がある奴がどんな野郎かと思ったらとんだ腰抜けだな。おい……………」

「その阿呆。何を勘違いしてるか分からんが……………あたしをこちらの尻軽女みたいに言われるとは大概にしてみらいたいのだな。お前には死罪で償って貰おうかと考えてたが……………孫十郎、あんたにはくたばるまであたしの下でこの武田信玄の目となり耳となり時には、足になって貰おう。それで、お前の罪は見逃してやる！！」

「あ、あれ……………おかしいな。武田信玄ともあろう御方が越後の龍

みたいに謀叛人を死罪に追い込まないっすか……ここに、勘助の師匠がいたら確実に肝を抜かされてたっすね」

「……………だろうな。だが、今回はあたしの落ち度がかなり大きかったようだ。謙信ちゃんが織田の残党を破ってから、わざわざ春日山城で大人しくしてるそうだし、氏康もあたしと謙信ちゃんを闘わせたいが為に珍しく同盟なんて守ってまで越後に目も向ける素振りも見せずに下野の宇都宮や結城・那須といった勢力を動かしちゃいない。もし、あたし等が小田原を包囲すればあいつはそういうところにすら目を向けて動かしてただろう。ほら、甲斐の手勢と合流し川中島まで一気に行くぞ」

あたしは、もう倒れそうな体の孫十郎に片方だけ肩を貸したまま北条と和議を再び結んだ後

小幡を引きずったまま甲斐へ戻り小幡があたしに降伏したのを宣言すると原昌胤を始め板垣信憲・甘利信康・横田康景の三人も受諾した上であたし達は、再び川中島で一戦を交える。

「さて、孫十郎……………勘助の分まで謙信ちゃんを黙らせる策でも楽しみにさせて貰うぞ」

「まったく、人使いの荒い姫様っすね。まあ、貴女様があんな恥ずかしい台詞を吐いたんすからちよっくらその言葉に期待せにや冥土にいるオヤジ共から罰があたりそうで怖いっすよ」

「アッハハハ！勘助以外は、父上に鍛えられたジジイ達だったかな！それは、応えられなきゃあたしも只じゃ済まさないぞ！後、お前の新しい屋敷だが……もうあたしの屋敷と一緒に暮らしてもいいだろ？最近、四郎がお前と一緒に寝たいと煩いんだ」

「はあああ！ちよつくら待つて下さい！あの屋敷こそ俺が休める唯一の居場所なんすよ？そこは、奪わないで下さいよ」

「……黙れ。また、お前があたしに齒向かれちゃ次こそ討たなきゃ行けないんだ。それに、あたしが欲しい奴をどんな手を使って手に入れるのもお前ならよく知ってるだろう。まあ、その為にもちよつとあんたを弄らせたんだがな。正直、相良良晴の手伝いで北条を潰してもあそこがあいつの領土になったらあたしがの天下取りがめんどくさくなるしな！後、言い忘れてたがお前はあたしの手足となった以上……今まで以上に拒否権があると思うなよ。孫十郎の物は家臣からその身も含めて全てが全てあたしのものだ。無論、お前のここもあたしの物になる訳だから他の女に手を出したら……二度と子を作れんようにしてやろう」

「アッハハハ……伊勢が北条氏康に頭が上がりゃん訳がよく分かった気がします。ったく、俺もあいつみたいに自分の領土が欲しくなってきたっすよ」

川中島に向かつてる最中に伊勢太郎の立場を羨ましがる孫十郎が溜

め息を漏らしてたが

こいつは、こいつで伊勢太郎が毎回相模まで呼ばれては朝から晩まであいつが移動する度に一日中つきつきりだつて話までは知らないそうなので

あたしは、この後こいつに伊勢太郎と同じ境遇以上を味わえさせる画策を考えながらも勝千代となつた時こそ一日中いっぱい甘えてやろうと密かな楽しみを頭の中で描いていたりする。

次回予告

「……………」

「……………伊勢、何黙ってんだ？おい」

「いや、小幡殿のくそ甘い話が後書きだけじゃなく番外編までではと思わなくてさ……………ちょっと羨ましいとか思ってる訳じゃないよ。そりゃ、私にゃ義重殿や一刀斎殿がいるけどさ。正直、私の小

田原での一日でも述べたら大抵は、義重殿や一刀斎殿の飯作りにたまに來られる來客の源四郎殿に紅茶や菓子の準備をしたりする訳ですよ。それに、比べてさ……お前さんが前々回の話の後書きで述べたとある一日ってあれ……メイド服の美少女に起こされたり飯の用意までしてもらうんだろ？……なんだろうな。この格差」

「まあ、お前さんは風魔の忍まで使ってたまではなっから氏康にストーキングされてるからな。密かな裏話を聞けば今川に仕えてた頃、氏康との面会時に義元もたまに胸の話をしたから”胸の大きなんぞに捕まる男は粕だ。大和撫子な美しさこそ日ノ本の文化にいざ候う”と氏康の真ん前で述べちゃったのが理由だと狸娘から聞いた事あんな……」

「……さあ、番外編もいよいよ最後！次回は相良良晴の天下分け目の小田原城攻防戦〜伊豆防衛戦〜」

「……凶星だったか」

「……本編で語られてない昔の事は忘れるべきです。では、次回もよろしく願いします」

「ん？今回は、お前が語る事になってるらしいな。氏康」

「ええ、基本的に貴女と何を語るか思い付かないわね。ただ……」

「ん？どうした？」

「この作品での甲斐の虎は、鬼の飼育に興味があるのだと感じたま
だよ。まあ、人間様に畏れられる者同士で仲睦まじいと思っ
てね」

「ふん。お前も伊勢とは人の事が言えないだろ……ただ、胸板を好
むとは珍しい奴だな」

「一言、多いわよ。全く、伊勢が私の前で言った事を貴女の耳にも
入れさせたいものね」

「……………大方、求める女に胸なんて関係無い的な事だろう。また、
お前にしては珍しく今川の家臣を取っ捕まえようとしていたらしい
な」

「私は、ただ欲しい物を手に入れるのに手段を選ばないだけよ。正直、あれを初めて見た時からいい駒になるかと思ってたし、今川義元や松平元康・織田信奈では扱いきれない駒だと狙ってただけなの。まあ、私の見立て通りこの話じゃ過去話で今川義元ですら扱いきれなかった話もそろそろ書くらしいじゃないのかしら？」

「……………相変わらず口だけは達者な奴だな。それに伊勢もお前に仕えてからかなり自由が無くなってる設定だな……………」

「あら？主人が飼い犬に嫉してるのと変わらないものよ。それに、あれも私以外に異性としても見れないらしいわ。やはり朝から晩まで改造してみると人って変わるものね。また、あれは何処かの不良犬と違って謀反なんて考えないから助かるわ。おまけに変な南蛮かぶれすら制限してくれるから助かるわ」

「……………まあ、今の関東は農業・交易・鉄砲制作に力を入れてるからな。本当、よく金を回す奴だよ」

「あら、他人の領内で鉄砲を購入する奴に言われたくないわね。あれがなきゃ織田と戦えないのでしょ？」

「ああ……………そういう意味では、強固な守りなだけにあたしの上洛戦でも助かってる。正直、堺から買い揃えるのには目が膨らむような

賃金だったからな。その点で考えれば港がある小田原は、資源だけ仕入れて鉄砲制作に夢中だから羨ましいものだ」

「そつちこそ、結構いい馬を育成してるじゃないの？それに隣国を羨むより己の領土を発展させるのも一国を治める主としては必要不可欠な事じゃない」

「まあ、それもそうだな……内政を整えねば、主なんざ務まらんのは確かだな。にしても、いい湯だなあ……………」

「まあ、太郎が管理する基本的に私専用の伊豆の温泉だもの。気持ちいいのは当たり前よ」

番外編相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦〜伊豆防衛戦〜（前書き）

ようやく、番外編もラストです。

番外編相良良晴と天下分け目の小田原城攻防戦〜伊豆防衛戦〜

私が葦山城の防衛戦を迎えて何日経ったかわからない程

毎回、松永・松平軍による大筒の発砲やら浅井軍が城から離れたところで三千余りの騎馬隊を率いて私が脱出するところを抑えてたり

今残された選択肢としては、このまま籠城戦を続けるか降伏するかはたまた派手に暴れて戦場で朽ちるか三択に絞った結果

戦場に出ようが降伏しようが松永久秀という畿内の要注意人物みたいな奴がいる時点で籠城策を選択する。

まあ、この選択肢は私自身が松永弾正という噂に聞く足利將軍家を襲つたり主君であつた三好家の御家老や一門衆を暗躍して仕留めた経緯があるとも聞く謎の人物と顔を会っただけでも何を仕掛けているか分からないものだし

迂闊に城内へ入れられても何をするかわかったものではないと考えながら私は、本丸に作つてあつた櫓から眺める日々が続いたりしながらも安房水軍がいつ動くかを見切る為にもまだこの城から出

られないだろうと考えており

向こうから和議という名の話し合いを設けられても私は断固として動く気配を見せずにいた為もあって向こうは、大筒なんてもので轟音を放ってるのだろうか

ここで、厄介なのが兵達の判断が鈍りやすくなる事だ。

まあ、私が率いる兵もしびれを切らせて動揺を見せている者もいるが

それより檣や鉄砲を用意し反撃の狼煙を上げているのだから迂闊に門を開ければ松永弾正の思う壺だろうな。

でなければ、あんな用意周到に他人の城門を囲むよう柵を作ってるのだ。大方、こちらの出方を伺ってまともに眠れていない兵達が冷静さに欠けてるところを利用して攻め込ませるんだろう。

いやはや、ここまで性悪女だと益々会いたくないものだ。

「義重殿には、常陸の防衛に回させている……はたまた、一刀斎殿は上総のお弟子さんの面倒で忙しいと聞く……そして、あの鉄甲船もここに置いて旧織田勢力に占拠されたら奪われる恐れもあって安房に伏せてある。さて、この戦況を潜り抜けようか……」

「申し上げます！松平元康殿が和議の使者としてお話をしたいと仰せですが追いつ返しておきましょうか！？」

今の戦況を頭の中で整理している最中に伝令役の者から松平元康が城門の前で待ち受けているとの報せを聞き

これも松永弾正の策じゃないかと内心考えながらもいつまでも城内に籠って援軍無き籠城戦を続けても埒があかないと考え私は、三方原の戦い以来会っていない元康の要求を呑む事にし

幾ばくか警戒させてる中、私は元康のを城内へ案内させ、彼女が何を考えてここまで来たかじっくり探る事にした。

「…………た、単刀直入に言いますが良いですね」

「ふむ。その方が助かりますな」

「では、言います。伊勢さんにはこの籠城戦で粘って貰って悪いですが降伏勧告をしてもらいたいのです」

「ふむ。丁重に御断り致しましょう。」

「…………… 忠次さんの言う通りですね。伊勢さんならこの城を死守するだろうと言ったです。ただ、小田原城は武田騎馬隊に相良サル晴さんの奇策があるかぎり落ちるかもですよ。それでも戦うのですか？」

「北条が落ちれば私も居場所を無くしたも同然ですからな…………… その時は、一戦交えてお相手させて頂きますぞ。さて、そろそろお引き取り願いますよう」

元康がこの場から去ろうとした最中、突如閉まっていた城門が開きその隙に、あの狸がニヤリと口許から笑みを浮かんで見つめておりよく見れば、私がいた三ノ丸の城門が既に松永弾正が仕掛けた爆風で吹き飛ばされ既に浅井軍が騎馬隊を率いて突撃を仕掛けている。

「…………… 本多左近。いや、今は伊勢太郎氏信とか名乗ってたな」

「ほう、男装がご趣味な浅井の姫大名が何を言う。それに、松永弾正の軍はもう気づいてるらしいが…………… 貴公等が北条に挑むなんざまだまだ甘かったようだな」

「黙れこの腹黒が。それに、この城は既に落とされたも同然……………」

大人しく降伏するんだな」

「も、申し上げます！！我が食糧を隠してたところが里見軍に燃やされました！！ま、また……………相良良晴殿が北条本隊から追撃を受けてる模様！！」

「な、何！？で、津田勘十郎信澄は、どうなっている！？ま、まさか……………」

「津田殿率いる後方部隊は、武田騎馬隊の一軍が裏切った為、相良良晴殿の本隊に敗走したとお聞きしましたが……………」

あの男装野郎が、女装趣味の津田殿の事を心配していたのに思わず笑いそうになったが

あれで、思った他真面目に指揮をしていたのだから大した者だと感服をする。

まあ、指揮をしながらも嬉し涙とはいえやや泣きながら采配を振るっていたのはご愛嬌だが

それでも、ここから退却指示をして私の前で太刀を抜き襲って来たのに、思わず手に持っていた太刀で一度防ぐが、なかなか諦め悪い

浅井備前守長政は、白馬に跨がりながらも此方へ再び太刀を振るい再び放たれた一撃を防いだもののこちらが、体勢を崩したところをもう一度狙おうと馬を走らす

自分の兵達が退却していくのを見届け浅井備前守がこちらを睨んだままここから退けてくれたお陰で何とか命を拾いこちらも城内の守りを再び固めるよう指揮しながら浅井・松平両軍が撤退するのを見届けていた。

その後、氏康様の本隊と合流するとそこには、立ち往生して両腕を組んで溜め息を漏らす氏康様が目前に立って待ち受けている。

「貴方にしては、今回の戦じゃ被害が大きかったじゃない。あの相良晴っていう西ではしゃぐ雄猿に本気が出せなかったようにも見えただけどうだったのかしら？」

「ハハ……氏康様に相手に女は殺せぬと無血開城まで求める御方でしたからな。ですが、次に此所へ攻め込めば容赦する気も更々ありません。ただ、今回は明智デコ頭殿が自らの主に謀叛を企てた予想外の出来事が起きたのが無ければ北は上杉・南は里見、千葉・そして、佐竹、宇都宮、結城、蘆名、相馬、南部、最上と奥州の大連合まで束ねる為にも古河久方を中心とした足利幕府の再興に力を回せたのですけどね……」

「それはそれで私の仕事が増えて休めないじゃない。とはいえ、こ

の戦であの山猿を追い出したからこつちも関東・奥州を束ねやすくなつたわね」

「ハハ、ただ武田信玄があの小幡昌盛等を再び纏めたのは気になりますかな……………」

この一戦が終えた後、私は未だ今後の流れでどう動くか読めない武田信玄が如何なる行動に出るか警戒しながらも氏康様がおられる小田原城へ帰還した後

氏康様が猿の顔を忘れたいからとその晩は珍しく彼女の部屋で共に眠りに着いた

次回予告

「あら、ようやく番外編とやらも終わったそうね」

「ええ。ただ次回から若干過去話に入る予定らしいですぞ……………」

「……………そうらしいわね。貴方が今川に仕えてた時代だもの。今思えばあれの声が今にでも聞こえそうよ」

「ハハ……………私はあの方の名を聞くだけであの声が脳裏からよみがえります」

「そういえば、まだ生きてたわね。さて次回は”姫の気まぐれ其の壱”らしいわ」

「ああ……………今思えば嫌な思い出ばかりですな」

「……………」

「あ、あの……………織田弾正殿。如何なされたかな？」

「私が最早死亡ってどういう事よ？正直、あれは、やり過ぎよね……」

「ハハ、気のせいかと……………」

「や・り・過・ぎ・よ・ね？」

「ハイ！申し訳ございませんでしたあああ！…だ、だからその火縄銃を額に向けしないで下さい！…」

「……………次は無いと思いなさい」

「りよ、了解しました！…」

第十四話 姫の気まぐれ其の巻（前書き）

久々に更新したなあ……（^| ^ ;）

第十四話 姫の気まぐれ其の壱

小田原城内で、籠城戦が未だ続く最中にて自分の屋敷内で大人しく休んでいた時だった。

最近、城内でも大して目立つ動きも無い上にあまり仕事が無いと暇を弄ぶ我が主君である氏康様がこの屋敷に赴く事が増えたせいか

何処にいても気を休ます余裕が無い私は、今日も退屈そうに室内から見える庭を眺めている主君に茶を淹れている。

「暇だね。奥州の田舎娘が邪魔なせいで近江の六角家が拠点にしていたところに力をいれている織田にも目を向けられるというのに……」

「……………織田と申せば、浅井・朝倉と一時和議を組み摂津の本猫寺攻略に力を入れてると風魔の者からお聞き致しましたな」

「……………本猫寺が落ちちゃえば畿内は織田のものになったゆうなものとなるわね。全く尾張の味噌漬けな姫にしては、氣にくわないわ。閑白がこんな関東まで文を寄越すのも分らないでもないわね」

「とはいえ、小田原を留守にして西に向かうにしても虎が牙を向け無い筈も御座いませんからな。それに、織田は上杉・武田と和議を結ぼうと動きださねば西に兵を配置する事は叶わんでしよう。ならば、こちらは、土佐に力を入れ始めている長宗我部元親・備後を治めていた浦上家を潰した宇喜多直家・安芸一国から大内・尼子といった西の大勢力を欺き今や周防・長門・石見・出雲・備前・備中・但馬・伯耆・安芸と山陰・山陽の勢力をほぼ手の内に入れておられる毛利元就といった勢力と手を組みとう御座いますが……」

「如何に結ぶか策が思い付かないのでしよう。良いわ。貴方には北条の性を授けるわ。その方が向こうと話しやすくなる筈よ。後は、何をきっかけに話を進めるかね……まあ、こっちの文から関白殿の策を上手くいかせる為にも貴方がそちらへ向かう事を記さないといけないわ」

氏康様が顔を赤くしながら北条の性を授ける話を進めた時には、流石に私も恥ずかしいあまり顔を赤くした。

まあ、玉縄城主で北条家を支えている女武将でもあられる北条綱成様というお方も先代当主を務め氏康様の亡きお父上でもあられた氏綱様が己のみの女子という条件で名を授けた話を今川に仕えていた頃

駿河で義元の下でお仕えしていた時に北条家で重鎮の一人でおられた遠山綱景殿という痩せこけて苦勞人という雰囲気が目立つお方が

ら聞いた事がある。

まあ、あの時は義元の顔色を伺いながら如何に駿河からあの我が儘で目立ちやがりな姫を西へと赴かせんようとしていた魂胆である事を元康殿に説明するのに精一杯だったが

あの時の話を駿河から去る時に思い出すよう語っていた綱景殿の手の内は、分からなかったが

最後に、北条への内応していた事を思い出す。

ただあの時は、内応に応じる暇も無く元康殿に今川が如何なる立場にいるか呑気に織田とぶつかっても北条や武田に駿河を狙っている事を説明したり

駿府で対武田防衛策を練るのに頭が一杯だった頃だったせいもあり氏康様の動きに目を向ける暇も無かった事を思い出していた。

「ふつ、今川に仕えていた頃ですら落ち着いて内務に目を向けていられなかったり織田と戦を交えても虎の牙に震える日々が続いておられました、桶狭間の戦を気に元康殿の参加で信玄殿の侵攻を防ぐ為にも織田の下に松平家の客将として援軍がなかなか出せない元康殿の代わりに槍働きをしました……あの姫は、織田信奈という者の後ろばかり追い続けあまつさえこの北条との同盟すら深くは

「お考えでは御座ませんでした」

「そんな姫に呆れる事を覚えた貴方は、この私に忠義を誓って下野や常陸を傘下に治めた結果、今じや私に全ての身と心を捧げる者として北条の性を授かる一人となるのよ。ただ、この性を授かった際、貴方には私があんな関白殿の策に乗ってやる変わりにも北の上杉謙信とさつさと話をつけて伊達の手勢とぶつかって貰うのが第一なのだけだね」

「大方、上杉謙信という軍神の力を改めて確認しこの小田原まで追い詰めた実力あらば古河公坊の足利家を利用しこちらと協力関係を築くようお誘いしてみても様子を伺うおつもりですな。で、話に乗らねば……………」

「貴方も目をつけている軍神と反りが合わない揚北衆にでもちよつと話をふればいいだけの事よ。ただ、上杉の事よりもこの北条を長く支えて私の妹みたいな存在でもある綱成は、戦や外交・内政と何から何まで優秀なのだけど彼女も役目が多い立場には変わり無いし、今では北条の要と言っても過言では無いわ。だから貴方には、綱成の補佐も兼ねて江戸城主として綱成と共に結城・千葉・佐竹・里見・宇都宮といった勢力といつても連携出来るような要としていて欲しいわ。でなければ、今の織田がぶつかったとしても対応しにくいもの。後、太郎には、今後新たに名を”北条氏繁”という名に変えて貰うわよ」

”北条氏繁”と私の新たな名を紙にあまり、表情を見せない氏康様

が何処か嬉しそうな感じで記しているのを眺めていた私は、彼女に初めて会った時の事を思い出していたせいか

最初に御会いし、駿河で自由気ままな姫と氏康様との会見が終えたあの日に駿府城から去るところまで職務上見届けた私にいきなり”今川なんか仕えてもろくな事が無いから相模に来なさい”と耳元で囁かれたのがきっかけで最初こそは、拒み続けていた筈だというのに松平元康という私を初めて拾って下さりお仕えし三河一国を守ろうと必死なところに惹かれた姿がいつの間にか織田信奈について行く一人の家臣みたいに見えた事からだったろうか

美濃攻めやら六角攻めと三河より離れた地まで援軍に向かう彼女の姿には、武田信玄という強者を知らないまま織田信奈の理想を支える事と数多の民を守る大名という立場を兼用している姿に内心ではあの御方が不安でならなかったのもあり文を通じては、何度も信玄を侮るにべからず三河・遠江の領内を構える事に専念すべしと浜松城の改装に力を入れるべしと案を出しても

あの頃の松平元康には、織田信奈と相良良晴が天下取りに熱中するのを支え続ける事を優先しているように見え

すっかり、私の事すらも忘れかけた時だったか

氏康様と同盟結ぶべしと案を出した頃には、もう己が無用だと悟り気づけば私は氏康様に頭を下げていた。

振り返れば、その後に武田の援軍として松平元康とぶつかる形となっていたが

あの時の松平元康という人物は、武田信玄という強者の風格を数多の犠牲を出してようやく学習したという点に心の何処かでは、何か安心した気持ちも無くは無かったのだが

その気持ちより、関東統一の夢を抱きながらも上杉謙信・武田信玄といった強者と渡り歩く為にも領内を固める為に自分も使つて下さる氏康様の姿に親身となる事を生き甲斐としている気持ちがより大きくなっている事に気付いてた時には、既に浜松城を落としていたのだから

我ながら今川家の下で元康に仕えようとした気持ちが偽りにすら感じる。

「……………それにしても、松平元康という姫にお仕えした己の気持ちが一体何なのか今となつては、わからなくなつて気が致しますよ」

「確かに、元々貴方が私に近付いたのは、あんな三河の大名を守る為に同盟の話を進めに来たのだったかしら？でも、この私と同盟を計ろうと貴方が動いていたのに対して貴方が仕えていたお姫様がわざわざ私との話を蹴ってまで織田とついたんだもの……………太郎、貴

方が三河の大名を主君として御限つても仕方ないわよ。それに、貴方がここに来て仕えてから下野や常陸攻略と手を伸ばしやすくなったもの。正直言つてここまで、私の野望が近付いたのは予想外だったわよ」

「まあ、伊達が邪魔せねばこの関八州も守りを固めつつ内政に目をする事に時間を費やす事も出来たのですがな……どうやら次からは、奥州に目を向けまたこの様な事が起こらないよう佐竹・宇都宮・結城と連携し岩代辺りまで兵を向けては如何でしょうか？」

「蘆名・相馬といった反伊達勢力に再興という形で私の傘下に加えさせる算段かしら？確かに、佐竹と蘆名は友好な関係らしいしこつちは、ただ蘆名の再興に力を加えてると印象を与えるだけでもあの田舎娘に従う者達の目がどう変わるかも面白そうね……」

「それに、あの田舎娘の母君は、最上義光というあの娘とは些か因縁ある山形城主にて羽後・羽前の勢力を延ばす野心家だそうです。となれば、邪気眼だとか騒ぐ小娘がここに籠城戦を続けている間にも最上も力を蓄えておれば如何に事態が進むか気になりますな……」

奥州の情勢を確認しなおしながらも地図に記されている羽後や岩代に指すと氏康様は、何か思い付いたかのような風魔の忍を使者として向かわせ邪気眼に領土を奪われ再起を狙っている蘆名・相馬家の残党に領内を取り戻すのに力を貸すという形で傘下へ加えた動きに西へ力を入れていた織田信奈・小田原城の防衛に兵を向けている武田

信玄・越後で戦況を見続ける上杉謙信が気付いた頃

既に、伊達が居城にしている米沢城が包囲網が進んでいたにも関わらず織田信奈に仕えている相良良晴が家臣達を率いて城を守る為に籠城していたとは、この時ばかり驚きが隠せずにいた。

次回予告

「まったく、何で俺が虎とやるんだよ！？全く、親父虎盛や虎胤のおやつさんに”虎”の一字を名で授けやがった信虎様とはちよつとばかり面識あるけどやつばあの戦好きなところが親子だとつくづく感じるよな……それに、次の場面じゃ俺がいよいよ小田原から抜け出して信濃の深志城から美濃でも岐阜城と並んで難攻不落の岩付城を攻略するんだつけ？まあ、俺に戦つつうもんを叩き込んだ勘助のジイの弔い合戦だつて腕はなるが……」

「……孫十郎。最近、小田原の籠城戦で退屈してたんだ。ちよつとあたしに殴られる」

「ま、待って下さい！！本当、待って下さいよ！！」

「……こういう時の土下座だけは早い奴だな。まあ、お前は次からあたしが直々に目をつけてやるから楽しみにしとくんだな」

「ハハ……それはどういう事でしょうか」

「ふん、そんなに汗が出る事でもないだろ？やはり勘助は最後の最後までお前を欺いてたぞ？何せ、あたしに何かあつたら武田家の親族衆でも名家に入る一条家をお前に継がせるなんて美濃へ旅立つ前に自室で書き残してたんだ」

「は、はあああ！！ちょ、ちょっと待って下さいよ！！俺、仮にも小幡家の後継ぎなんつすよ！！」

「ああ……あの頑固オヤジがお前に嫁がせた家か。安心しな。それくらい、後でいくらでも手を打っておくからさ。孫十郎は、信龍っていう名に慣れてくれれば助かる。何せ、あたしは信廉を除けば親族衆に目を向けるの下手だからなあ……それに、お前が武田の一族に身を置いとけばあたしの手の中で、好き放題出来るだろう」

「い、いや………御館様のお膝元となると畏れ多いというかなんつつつか………御館様の血筋は、鎌倉時代から源氏の血を持つ名家つすよ！？あんな相模の下克上で活躍した孫娘とは訳違うんすから勘弁して下さいよ」

「安心しな。原虎胤の一人娘でもあつた昌胤と一回離縁したのもすっかり忘れてたし、あたしはそういうの気にしないから。ただ、”お前の一生はあたしのもん。あたしの一生はあたしのもん”ってい

うのがお前に与えた新しい人生だ。因みに、親族衆や四天王の中でも反対派が無かったからお前に拒否権は無い。また、信廉はかなり賛成してたな……」

「な、なんすか！！それって俺そういう立場だと色々自由がきかないっすよ！！というか、ごく普通な大名家に嫁ぐ姫様と立場が似てるし！？」

「まあ、伊勢太郎氏信も北条氏繁という名でお前と似た立場なんだ。気にする必要も無いだろ。さて、次回はそういう訳で”姫の気まぐれ其の式〱甲斐の龍、誕生〱”だ」

「な、何か理不尽だあああ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7718t/>

織田信奈の野望～相良良晴ともう一人の転生者～

2011年9月18日22時34分発行